教訓童話

偉人の幼時

特61－70
1200500932420
261
629

特61
70

江口天峯編

教訓童話

偉人の幼時

東京
文盛館發行

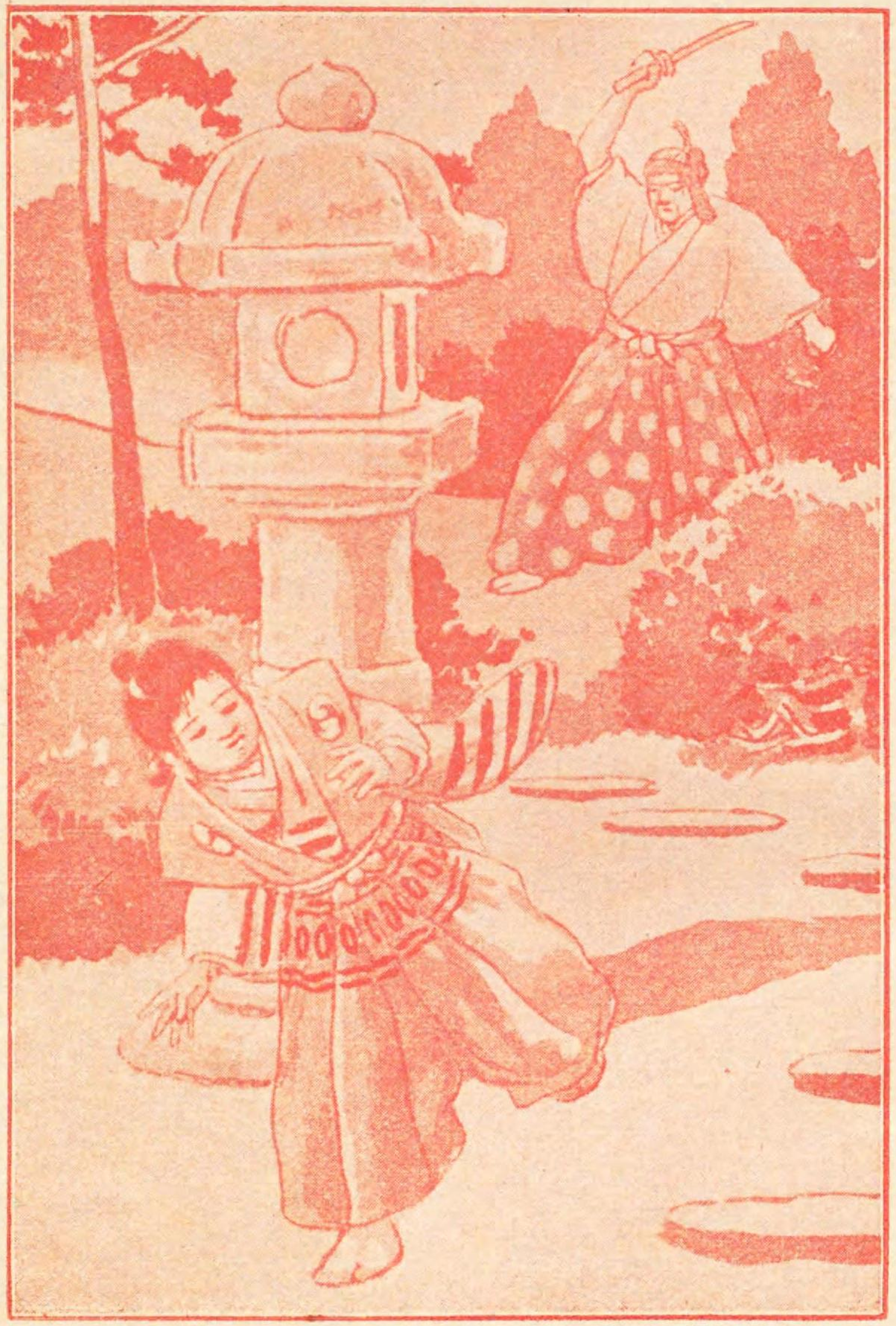
明治
43.10.29
内交

目次

西郷隆盛幼時の豪膽……一
中江藤樹幼時の孝心……九
二宮尊徳幼時の勤勉……一九
雲井龍雄幼時の大膽……二九
楠正行幼時の戯戰……三五
一休和尚幼時の頓智……四三
大石良雄幼時の智勇……五七
ガーフキールドの幼時……六四
宮本武藏幼時の惡戯……七二
荒木又右衞門幼時の沈勇……七九
橋本左内幼時の啓發錄……八三
鎮西八郎爲朝幼時の不敵……一〇三

毛利元就幼時の大望……一一一
松平樂翁公の幼時の自敎鑑……一一五
三條實美公幼時の奇行……一二五
ネルソン幼時の冒險……一二九
松平信綱幼時の操守……一三五
フランクリン幼時の勉强……一三九
森蘭丸幼時の心がけ……一四八
福島正則幼時の剛腹……一五二
豐臣秀吉の幼時……一五八
桐野利秋の幼時……一六八

目次終



開山劍法之元祖
水

教訓童話

偉人の幼時

江口天峰著

西郷隆盛幼時の豪膽

西郷隆盛は文政十年十二月七日、鹿兒島の加治屋町で生れました。骨格がたくましく、勇氣が面にあらはれて、其の擧動も他の子供とは異つてゐました。お母さんも中々賢い人でしたから、何時も曾我兄弟が長い間艱難辛苦して、遂に父の仇工藤祐經を富士の狩場で打ち取つた物語をしてきかせ、又『我が日本の武士道は誠を本として、親には孝、君には忠、兄弟は仲睦じくするのが肝要です、假令鼎を

擧げるほどの力があり、虎を打ち殺すほどの武勇があつても、誠の一字を忘るれば、君には不忠の臣となり、親には不孝の子となります』と言ひきかせられました、隆盛がえらくなつたのも一つはお母さんの敎へがよかつたからです、それで隆盛も

『昔から仇討をしたものが多いけれども、曾我兄弟の仇討ほど人を感心させるものはない、それは兄弟の誠がさうさせるのである、私は子供の時母親に抱かれながら、何時もその物語を聞くのが何より樂みであつた』

と言ひました。

隆盛は七才の時、三字經だの、孝經だの、四書などの素讀を了へ、それから聖堂に入つて普通の漢籍を勉强し、講武所で武術を學びましたが、十三才の時横堀三助と喧嘩をして、名をあげた事があります、それは鹿兒島では鹿兒島市から六里ほどある、伊集院村にある妙圓寺(島津家の廟所)に、毎年九月十四日の夜、武者參詣といつて各方限の若侍共が、甲冑、陣羽織の武者姿で參詣するのですが、血氣盛な者どもが寄り集るのですから、少しの事から喧嘩がはじまつて、血の雨を降らすことが少なくありませんから、土地の人は喧嘩祭とも言ひます、此の祭は關ヶ原の戰ひに、豐臣方に味方して出陣した島津義弘が、慶長五年九月十五日の戰ひに、筑前中納言が裏切したゝめに、豐臣方の敗戰となつて、諸大將がバラ〳〵と秋の木の葉が風に散るやうに、逃げ散るのを見て大に憤り

『さてもきたなき方々の振舞よ、いで入道が老後の思ひ出に、今一度家康と戰つて、潔よく討死しやう』

と、國元から召し連れて來た、勇猛無雙の薩摩隼人を從へて、雲霞

のやうな東國勢を切り開いて、家康の本陣間近く切り立て〳〵、縱橫無盡に戰ひましたが、敵の大勢には敵し難く、流石の薩摩の隼人も次第〳〵に討たれて、殘るは僅かに八十人餘、そのうち鎧武者は十九人となりました、義弘は齒ぎしりして

『今此處に鎧武者が三百騎もあるならば、見事家康を生捕してやるに、あゝ殘念、此の上は一騎になるまでも戰はふ』

と、戰死を覺悟してゐるのを、老臣長壽院盛淳が諫めて、君の具足を頂いて君に代つて討死しました、此の間に義弘は山路を越えて大和から兵庫に出で、船にのつて薩摩に歸りました、それで薩摩では其の時の義弘の無念を慰むる爲めに、毎年九月十四日の夜から十五日にかけて、鎧武者の裝束で妙圓寺參詣するのです。

はなしかはつて天保十年九月十四日、空は隅なくはれて月は清く冴

えたので、加治屋町方限からは、僅か十三才の隆盛が頭となり、二十餘人の子供が一團となつて出かけました。

此處に又上方限に橫堀三助といふ、その時十六才の惡少年、力の強いのを自慢して、傍若無人の振舞をしてゐましたが、これも同類の惡少年どもを引き連れて、妙圓寺參詣と出かけました。すると途中の松原で西鄕方の同勢と出逢つた、橫堀組は西鄕組を子供と侮つて無法にも、西鄕方の一人を鎧の袖で押し倒して、そのまゝ行き過ぎやうとしましたから、年は少なくても西鄕方の同勢は、何んでだまつてゐませう、憤然として

『無禮者め』

と咎めると、橫堀組はドッと笑つて

『汝等の眼は何處についてゐる、耳があるならよッく聞け、我等

は上方限に隠れなき横堀組だぞ、汝等如き小冠者の一人や二人、鎧の袖で押し倒せばとて、言ひ譯けするやうな口は持たんワイ、苦情などとはチヤンチヤラをかしい』

と、聲高々と打ち笑ふを、西郷方は聞き兼ねて

『何んだ無禮者、横堀組にせよ何組にせよ、我が同勢に恥を與る上は容赦はならぬ、我が同勢の恥は方限の恥、子供と思ふて無禮者』

と、腰なる刀に手をかけて切り込まふとするを、西郷は

『各々暫らく待たれよ』

と、横堀の前に出でゝ恭々しく一禮し

『我れは加治屋町の西郷小吉と申すもの、横堀殿とは始めて承はる君等は長者我れ等は幼者、我等に若しも間違あらば敎へらるゝが道なるに、幼者と侮り我が儘勝手の御振舞は、小吉合點が行き

申さぬ、御返事あらば承はらふ』

と、子供ながらも流石は隆盛、正々堂々とつめかけると、横堀方では弱味を見せてはならぬと

『なんだ小癪なことほざくな、今更理窟聞く耳は持たぬワイ、若情があるなら腕づくで來い』

と、臂を揚げて進みよつたので、西郷今は是非なく

『一同掛れッ』

と、號令し、二十餘人横堀組に打つて掛りました。子供ながらも日頃鍛へに鍛へた腕前、横堀組はあたりかねて、あとへ〳〵とあとすざりする、これを見た横堀三助大に怒り

『エヽ、面倒なり引き組んで勝負を極めやう』

と、隆盛目がけて飛びかゝつて來ました、隆盛はさるもの、應々、

といつて挑み合ふ、年は下でも祖先無敵齋の血統を引き繼いだ隆盛、また〻くひまに三助を組み敷き、散々に打ち懲らして道端へ投げつけました。西郷組はワーツ〳〵と鬨の聲をあげる、横堀組は倒れた大將を抱き起して、匐々の態で逃げかへりました。

それから西郷組は妙圓寺に參詣して、明方家に歸へりましたが、隆盛は喧嘩のことは一言も父母にいはずだまつてゐました、けれども翌朝になると、妙圓寺の街道で隆盛が横堀三助を投げたといふ噂が鹿兒島市中に廣がつて、誰一人隆盛の剛勇を譽めんものはありませんでした。

一方横堀は隆盛に投げられたのを怨みに思うて、卑怯にも十月の或る日、隆盛が聖堂からのかへりがけ俄か雨に降り出されて、頭から羽織を被つて馳けて行くのを、物蔭から不意に現はれた三助、物も言はず後から、眞二つになれと斬りつけました、すると隆盛は飛鳥の如く身をかはし、卑怯者めと腰を攫んで、傍の小川に投げ込んで、そのま〻家に歸りましたが、肩先から血潮が流れ出づるので衣服を脱いで檢べて見ると、首尾よくはづしたと思つた三助の切先で、したゝか肩先を切られてゐましたので、隆盛もハツと思ひましたが、父母に告げて心配かけてはならぬとだまつてゐたもの〻、其の後痛みが烈しくなるばかりであるので、致し方なく父母につげて、醫者の治療をうけました。

中江藤樹幼時の孝心

近江聖人、中江藤樹は、幼名を藤太郎といひ、慶長十三年三月七日を以て江州高島郡小河村で生れました。其の祖父は伊豫大洲の城主

加藤遠江守泰興の臣です。父は隱れて農となり、田畑を耕しながら書を讀んでをりましたが、祖父に先だつて藤太郎が七八才の頃死んで仕舞ました、そこで母は藤太郎を祖父に頼んでおいて、その身は故鄕の江州小河村にかへりました。

藤太郎は幼にしてお母さんに離れ、祖父さんに從うて伯州に行き、また伊豫の大洲に行きましたが、子供ながらもたゞ一人のお母さんが、遠く故鄕にのこつてゐなさるので、片時もお母さんの事を忘るゝことはなく、朝起る時でも夜寢るときでも、何時もお母さんのことを思うてをりました。

ある時お母さんから祖父さんに手紙が來ましたから、藤太郎はよろこんで、何時も忘るゝことのないお母さんの容子もわかるだらうと思ひ、祖父さんに願うて其の手紙を讀み聞かして貰ひますと、別れ

るときに人間らしい者にならぬ內は決して故鄕に歸つてはなりません、假令中途でたち戾る樣な事があつても、お母さんは決して逢ひませんよ、と言ひ聞かされたことも書いてあるし、御仕立で武藝や學問も日に〳〵上達することでありませう、蔭ながらそれを樂んでゐますといふことも、若し御教訓に違ふ樣なことがありましたらばどうぞ嚴しく折檻して下さるやうに、といふことも書いてありますので、親思ひの藤太郎は淚を落しながら、それを聞いてをりましたが、手紙の末に、これまで馴れなかつた朝夜の水仕事に、先頃から皸とかいふものが、手足に出來まして、誠に難儀いたしてをりますと書いてあつたのを聞いては、打ち伏して泣きましたが、やがて淚を拭うて祖父さんに向ひ、どうかお母さんの許に往つて、お手傳したいからゆるしてくださいと願ひましたが、祖父さんは中途で歸つ

ても、お母さんは逢つてはくださらんからといつてゆるしませんでした。

藤太郎はお母さんの手足に皹といふものが出來たといふ事を聞き、皹といふものは手足の皮は破れ、肉は裂けて、雪の朝や、霜の夜などは非常に痛むものであることを知つて、益々お母さんのことが氣にかゝり、何とかして皹の藥を得てお母さんにあげたいと思ひ、誰れ彼れにたづねまして漸く大洲から六里程ある、新谷といふ所に中田長閑齋といふ、大阪落城の時落延た老人があつて、皹の妙藥をこしらへて、能く人の痛みをとめるけれども、たゞ今その人は切支丹宗門の人であるとかいつて、お上の詮議中であるから、その藥さへも人にあたへない、といふことを聞きましたから、翌朝早く起きて新谷をさして出發しました。

十歳の藤太郎は初めての一人旅に、六里の道を心細く思ひながら、新谷について中田の邸に行つてみれば、こはそも如何に、澤山の農民は竹槍や、鋤や、鍬などをもつて邸を固め、十餘人の武士は物の具を取つて、居並でゐるので、邸に入ることも出來ず茫然してゐましたが、やがて心をかためて門に入り、長閑齋に逢ひたいと申しこみますと、早速逢つてくれましたから、藤太郎はその前にすゝみいで、行儀正しく地に跪いて、母の爲めに皹の藥を得たいと思うてまゐりました、とはなしました、すると老人も其の孝行に感心して、すぐ皹の藥をとりだしてあたへましたから、藤太郎は大變よろこんで其の儘江州指して旅だちました。

行くほどに日が暮れたので、宿をからうとすると、金のないものはとめることは出來ないと、すげなく斷はられたので、しかたなく此

の上は疲れるまで歩み、野でも山でも倒れた處でねてやらうと元氣を出してたち去りましたもの丶、足はだん／＼痛んでくる、腹は一歩ごとに空いてくる、夜はまた次第／＼に寒くなつて來るので、一憩しやうと思うて路傍の石に腰打掛けますと、何時の間にか寢込で仕舞ました。

ところへ子供の名をよびながら、子供を尋ねて來た、ある所のお母さんがこれを見て不思議に思ひ、よび起してそのわけをたづねますと藤太郎はお母さんに輝の薬をあげやうと思うて、江州まで行くのですけれども、金がなくて宿を斷はられましたから、今夜所處で夜を明さうと思ひますと答へますと、その人は驚いて家に連れて行つてとめてくれました。藤太郎は翌朝早く起きて厚く御禮をいつて立ち出でやうとしますと、そのうちでは藤太郎の親孝行に感心して、み

ち／＼の使錢にするやうといつて、金をくれました。藤太郎は御蔭でそれからは宿を斷はられる心配もなく、足もだん／＼なれて今治の港につき、其處から船にのつて兵庫に渡り、一日も早く薬をお母さんにあげたいと、江州さして急ぎましたほどに、はや滋賀の山越も過ぎて、比叡の麓のある峠にかゝりました、小河の村は此の峠の向にあるので、草鞋は破れたけれども、腹は空いたけれども我慢して、道もわからぬ雪の山路を、竹の杖一つをたよりにして、雪明に夜の道をいそぎました。けれども僅か十歳の子供、長の旅路に疲れてゐるのに、またこの雪の夜道、何時とはなしに足は凍へ、手は痳れ、腹は空き、衣服まで氷つて人心地を失ひ、降り積む雪の中に倒れて、まさに凍死せんとするところを、運よくも辻堂を護つて、雪路になやむ旅人をたすくる僧樣にたすけられてあやうき命を拾ひ、

もてなしの粥に元氣がつくとまたそのまゝ夜の明けるのも待たないで、村をさしてでかけました。伊豫の大洲から海山越えて百里の道をいそいで來た藤太郎が、お母さんの村が見えた時の心の内は、どうでありましたらう。やがて藤太郎わが家の門口にたちよりますと誰れか水を汲んでゐる音がするので、誰れかと思うてよくみると、それがなつかしい〳〵お母さんでありましたから、藤太郎は覺えずその側に走り出で跪き、唯今まゐりましたと言ひさま、代りて水を汲ふとしましたが、お母さんは釣瓶の綱をはなさずに、何しに歸つて來ましたかとたづねました。すると藤太郎はお母さんに皹の藥をあげたいばかりでかへりましたといふと、お母さんは堰きくる涙を押へながら、海山遠く遙々とかへつて來たのを、内にも入れずに、背戸口に立つたまゝ降る雪のなかで、學問の中途にかへつて來ても、

お母さんは逢ひませんからといつたのを忘れましたかと叱りつけましたので、藤太郎は落つる涙をはらひのけ、聲を振はして其の罪をわびました。お母さんは此の樣を見て心もはりさけんばかり、家に入れてあたゝめてやりたいは山々ですが、弱い心を見せてはためにならぬと心を定めて、一人旅してきたのなら又一人旅してお歸りなさい、お母さんは二度と逢ひませんから、其の足ですぐに伊豫にお歸りなされ、といふと、藤太郎は承知して、さやうならばとたちあがり、皹の藥だけはお受とり下されませとさし出したから、お母さんはその藥をとつて急いで家に入り金をもつて來て、これを使錢にしなさいと渡しますと、藤太郎はどうぞその金で水仕の女を雇うて下さい、と何處までもお母さんを思ふいぢらしさ、お母さんも涙をながしながら、その金を持つて一時も早くお歸りなさい、といは

れましたので致し方なく、さやうならば御母さん御機嫌よろしくとまだ降りやまぬ雪が巴卍とみだるゝ中を、見かへりながらひきかへしました。泣いて別れ行く藤太郎の心の中、泣いて見送るお母さんの心の中、思ひやられて涙がでますが、藤太郎が他日學なり業とげて、その名天下になりわたり、その德化はよく泥棒や駕籠舁きの雲助共にまでも及んだといふものは、まことにこの賢明剛毅なるお母さんのたまものであります。

藤太郎はお母さんの戒によつて、すぐに伊豫の大洲なる祖父さんの許に還りましたが、それからは堅くお母さんの敎を守つて、學問武藝が人々に秀づる樣にならねば、決して二度とお母さんの許には還らんと決心しまして、他の人達が春は花見に、秋は紅葉狩に、暑いといつてはなまけ、寒いといつては遊んでゐる時も、一心不亂に勉

強しました、十一才の或る時大學といふ本のなかにある

自天子以至庶人。一是皆以修身爲本。

とあるところを讀みまして、深く感心し、人に生れて聖人にならなければ、生きてゐても世の中に益もなければてがらもないと思ひ、それからは尙一層勉強をはげみました。僅か十一才で聖人にならうなどゝ考へた藤太郎は、果して後の世までも聖人とうやまはるゝ身となりました。何んとえらいではありませんか。

二宮尊德幼事の勤勉

二宮尊德は名を金次郎といひまして、今から百二十年ばかり前に、相模國の酒勾川のほとりの柏山村といふ處の、百姓の家に生れました、六七歲の時から遊ぶ仕方も他の子供とは違つて、外の子供は

皆凧をあげたり、獨樂を廻はしたり、又は竹馬に乘たりして遊ぶのが極りでありますのに、金次郎はそんな遊びはあまりせず、家にゐて親の手傳をしない時は、酒匂川の堤にいつては、柳の枝を川岸に押し込んで押木としたり、又はその外の木を植えたり、或は小石や土塊などを運んで、堤の低い處を埋めるやうなことなどをして遊ぶのを、何よりの樂みとして居りました、それ故村中の人々は、金次郎を普請小僧とか、土手小僧などゝいつてほめてゐました。

酒匂川は雨が降りつゞくと、水が一ぱいになつて土手をこはしたり田畑を埋めたりすることが度々ありましたが、或る年の大水に金次郎の家の田畑も、大方流されて作物を仕つけることも出來なくなりましたから、元から貧乏であつた家は益々貧乏になりました。お父さんは利右衛門といつて大層酒が好きでありましたが、貧乏であり

ますから思ふ樣に酒を買ふことが出來ません、金次郎は子供心にも大層氣の毒に思つて、親に孝行をするといふのは、唯親のやまひの時に、看病するばかりではない、親の好きな物を進めるのも大切なことであると考へて、それから弱い手で草鞋をつくつてそれを賣り其の代金で毎日一合づゝの酒を買つて父に進めるのを、何よりの樂みとしました、一合といへば僅かのやうでありますけれども。毎日のことでもあり、其の酒の中には金次郎が厚い親思ひの心が、こもつて居ることでありますから、お父さんも大層喜んでゐたさうであります。

金次郎は十二歳の時から土手普請の人足に出ました、けれどもまだ十二歳といふ子供のことですから、一生懸命に働いても、一人前の仕事は出來ません、そこで金次郎はつくづく思ふには、人々は自分

の家が貧乏なのをあはれに思つてくれゝばこそ、力の足らない私の働きを一人前と見てくれるのである、併しそれでは氣がすまない、何んとかして其恩がへしをしてやらねばならぬと思ひ、それから毎晩おそくまで起きてゐて、しきりに草鞋を作つてためました、或る朝、いつもより早く草鞋を持つて普請場に行きまして

『私は御存じの通り幼年で、一人前の役にたちませんのを皆さんの御蔭で一人前としてつとめて居ます、此の草鞋は粗末な作り方でありますが、いさゝか其の御恩返しに差しあげますからどうぞ御使下さい』

と、いつて草鞋を出しました。其の場に居合はせた人々は、皆其志に感じて其の草鞋を受けとり、ます／＼金次郎を大事にしました。

金次郎もまた益々よく働らいて、外の人達が休んでゐる時でも、自

分は少しも休まなかつたから、力の弱い子供とはいひながら、大人よりも却つて澤山の仕事をしたといふことであります。

ある年お父様が病氣にかゝりましたので、金次郎は一生懸命に看病しましたが、その甲斐なく病氣は日増に重くなつて、とう／＼なくなつて仕舞ました、金次郎は非常に悲しんで、食物も喉を下らぬほどでありました。お母さんも大層嘆いて、

『此の後はとても自分の手一つで三人の子供を養ひ育てることは出來ない、末の子の富次郎は、いつそ親類にでも預けたら、どうかかうか二人の子供だけは、人並に育てることが出來るであらう』

と、思つて富次郎を親類にあづけました。ところがお母さんは、寝ても覺ても預けた子供のことばかり思つて、夜もろく／＼眠らずに悲しんでゐました。金次郎は子供ながらも、お母さんが悲しみもだ

えてゐるのを見るにしのびず、其のわけをたづねますと、お母さんは、

『富次郎を預けてからは乳が張つて、痛くて眠られない』

と、いひました。金次郎は、これはきつとお母さんが富次郎の事を心配して、あのやうに悲しみもだえてゐなさるだらうと思つて

『小さな小供一人位、家にゐたからつて、何程の費用もかゝることでもありますまい、私も明日から山へ行つて薪をとり、それを賣つて富次郎を育てる費用の助にしたいと思ひますから、どうぞあの富次郎を呼びもどして下さい』

と、すゝめましたから、お母さんは大變喜び、其の晩すぐに富次郎を連れに行かうとしました、そこで金次郎は

『お母さん今夜はもう夜もふけて、女一人で夜道するのはあぶない

ことですから、明朝早く私が行つて連れてかへりますから、それまで御まちなさい』

と、いひますと、お母さんは

『いや、お前始め、明日から働いて、富次郎を育てる費用をまうけてくれるといふものを、親の身になつて夜道する位は何んでもないことです』

と、いつて、それからすぐに行つて、富次郎を連れてかへりました

その後金次郎は、毎朝早く起て山に行き、柴を刈つたり薪をきつたりして働き、夜はおそくまで繩をなつたり、草鞋をつくつたりしてそれを賣つて暮しの助けといたしました。

けれども不幸には不幸の重なるもので、お母さんもまたお父さんがなくなつてから二年目に、重ひ病にかゝつて僅か十數日で死んでし

まひましたから、殘るは金次郎と弟二人であります、田畑もなく貯へもないのに、子供ばかり殘つたことでありますから、親類の人々は見かねて相談の上、弟二人は母の實家に引とり、金次郎は伯父の萬兵衞のうちに引きとらるゝこととなりました。

萬兵衞は金次郎をむごく扱ひましたが、金次郎は少も氣にかけず、晝はよく萬兵衞の家業を助け、夜は燈火をつけておそくまで學問いたしました。萬兵衞はよほどわけの分からん人と見えまして、金次郎が學問するのを見て

『おれはお前を養つておく爲めに多分の入費がかゝる、お前はまだ子供で其の費用だけの働きも出來ないのに、自分勝手に學問などして油を費すは宜しくない』

と、いつて叱りつけました。

金次郎は少しもさからはずに、たゞハイ〳〵と萬兵衞のいふことを聞きましたが、併し『人と生れて文盲となるのは殘念である。ことにすたれた家を興さうと思ふからには、是非とも學問をしなければならない、此の家の油を使へばこそ叱られもする、若し自分の力で油を買つて學問したら、別に叱られもすまい』と考へました、それで金次郎は川ばたの荒地を耕して菜種を蒔きつけ、暇のある度毎に心をつくしてその世話をしました。ところが天も金次郎を不憫に思つたか、菜種の實七八升もとれました。金次郎は大に喜んで、早速それを小田原の町に持て行つて、油と取りかへて來て、其の夜からその油で、また學問を始めました、すると意地の惡い萬兵衞は

『昔から詩をつくるより田をつくれ、といふ言葉がある、つまらない學問などをするよりも、繩でもなつて家業の手傳をせよ』

と、叱りつけました。流石の金次郎も心の中で『さても無理なことをいふものだな』と思ひましたが、そんなことは色にも出さず、萬兵衛のいひつけ通りに、晝は山に行つて薪をとつたり、柴を刈つたり又田畑を耕したりして働き、夜になると繩をなつたり、筵を織つたりして油斷なくよく働らき、そして夜業がすんで皆が寝しづまるのを待つて、そつと床を出て火をともし、光が外に漏れないやうに行燈に着物をかけて、毎晩大てい鷄の鳴く頃まで勉强し、また何時も本を懐に入れてゐて山や田畑に行く時や歸る時でも、歩きながら勉强しましたから、後には學問も立派に出來る人となりました。また暇〳〵には持主の無い土地をひらき、それに植つけなどして貯はへもしましたから、つひに家も興すことが出來、人の家までも興してやり、窮民を救けたり、大いに國家の公益をはかりましたから、明

治十三年、朝廷其の遺族に金を賜うて其の功業を賞せられ、また二十四年には正四位を贈られ、二十五年には尊德の高德を慕うてゐる人々が相談して、官に願つて小田原城趾の南の、高い處に莊嚴な神殿を構へて其のみたまをまつり、『二宮報德神社』となづけました。

雲井龍雄幼時の大膽

雲井龍雄は米澤藩士で、身分の餘り高くない貸物藏役頭、中島惣右衛門の二男で、弘化元年の三月二十五日、出羽の國米澤の袋町で生れました、幼い頃から筆をとつて書をかいたり歌を詠だりして、人人を驚かしてゐましたが、また戰ごつこが何よりの好きで、自分が大將となつて、土や泥を捏て城の壁の形を造り、澤山の子供達に命令して之を乘取る眞似などをして、無上の樂みとしてゐました。

或る春の事、猪吉は例の如く町の小供達と一緒に、餘念なく遊んでゐましたところが、一つの凧が風のまに／＼ひら／＼と飛で來て、その側近く落ましたから、一同は『それ凧が落ちて來た、踏みつぶしてやれ』といつてゐる處へ、凧の持ち主は二三の仲間と共に馳けつけて來て、この様をみ大聲をあげて叱りつけました。すると一同は其の勢に驚いて、蜘蛛の子の様にバラ／＼と遠く逃げ散りました。けれども猪吉は泰然として其處を動かず、足をあげてその凧を散々に踏み壞してさてその子供等に向つて

『貴様達には此の凧の骨を遣るから、持つて歸へれ』

と、いひましたから、その者共は氣を呑れて仕舞ひ、そのまゝすご／＼とたち去りました。

また或る時一人の友達と『武士は歴々』の歴々の發音のことについ

て議論をはじめ、友達はレキ／＼だといひ、猪吉はリキ／＼だと言ひはつて、勝負がつきませんでしたから、猪吉は

『それならば二人では勝負がつかんから、近所のおぢいさんに孰方が正しいかを尋ねて、勝負を決しやうではないか、そして負けた者は罰として、大きな椀で水を十杯飲むことにしたらどうだ』

と、いひますと、友達もすぐ贊成して

『よし／＼、それなら負たら君ものまねばならんぞ』

と約束して、二人手を携へてそのおぢいさんの處へ行き、レキ／＼とリキ／＼と、どちらが眞でせうかとたづねますと、生憎猪吉の負けとなつて、約束の水を十杯のまねばならぬことになりました。そこで友達は椀をもつて來て井戸ばたに行き、水をくんで猪吉に飲ませました。流石の猪吉もはじめの二三杯は難なく飲みましたが、七

杯八杯となつては最早飲みづらくなり、腹を撫でゝ如何にも苦しさうに見えましたから、友達は見るに見兼て

『どうだ苦しいだらう、もうこれで許してやらう』

と、いひましたが流石は猪吉苦しみながらも頭をふつて、

『なあに、男子が一旦約束したことだ、たとへ腹がはり割るとも約束しただけ飲みほさんでおくものか』

と、いひながら、遂に約束の十杯を飲みほしてしまひました。

猪吉は八才の時から書方や四書五經の素讀を學びました、これまでの荒々しい遊びも、年とともに益々募るばかりでしたが、根が穎敏の子ですから何事も解りがよくて、他の子供達よりもずつと進歩が早いので、先生も末望みある少年とあつて、一層目を掛けて敎へてをられました。

月日のたつのは早いもので、猪吉は早や十二才となりました、それでも例のお山の大將、荒遊びは一向やまりませんでしたが、或る時お父さんとお母さんとが、人に向つて

『うちの二男の猪吉は大膽で困ります、あんな聽かぬ氣の者は中途禍を受て身を亡ぼすでせう』

と語つてゐるのを聞いて、子供ながらも悟りの早い猪吉は

『あゝ自分ももう十二才になつた、お父さんやお母さんもあんなに心配してゐなさるのに、亂暴ばかりしてゐるではない』

と心をきめて、それからはお山の大將眞面目になつて日々藩校にのぼり、一生懸命に勉強しましたから、忽にしてその學力は藩校の友達を壓するやうになりました。

ある日のこと猪吉は佐藤といふ友達と、先生の前で左氏傳の講義を

しますと、どうしても猪吉佐藤にかなひませんでしたから、猪吉は殘念でたまらず、藩校から歸るや否や、左氏傳をよみにかゝり、よるになつてもやめず、夜がふけてもやめず、遂に一寸も眠らずに悉く讀み終つて仕舞ました。これを聞いて佐藤が猪吉のところへ行きますと、机の上に一尺ばかりの木の棒がのつてゐるので、不思議に思うて

『一體あの机の上にある木の棒は何んだね』

と聞きますと、猪吉は

『あれは僕が左氏傳を讀む時、夜ふけになれば眠くて仕樣はないから、初めは眼に薄荷を塗りつけたが、暫らくすると又眠くなつて來てかなはぬから、次には蕃椒を嚙んでみたが、これまたたゞその辛いのがつらいばかりで、效果がないから、遂にあの木の棒

を以つて頭を擲ながら、やうやく左氏傳を讀みをはる事が出來たのだ』

と、いつて笑ひました。

猪吉は成長して國事に奔走し、その身は遂に斷頭場裡の露と消えました、雲がなければ龍も天にのぼることが出來ぬと同じく、あつたら天下の奇傑も時代に逢はねば、また如何とすることは出來ないのであります。

楠正行幼時の戲戰

楠正成、新田義貞、名和長年等のために、散々に打ち破られて、這々の體で九州へ落ちのびた、足利尊氏は、間もなく大勢の兵を引きつれて攻め上つて來ましたから、天皇も大層お驚き遊ばして、早

速正成等に尊氏の軍勢をふせぎとめる樣に、と御命令になりました。その時正成は僅か七百人ばかりの小勢を以つて、尊氏の大軍にあたらうとしましたが、今度の戰爭には迚も生きて還ることは六ケ敷と思ひましたから、其の時僅か十一歳の正行を櫻井驛に呼び寄せて、

『獅子は子を産んで三日目に、其の子を千丈もある深い谷に投げ落して、その氣力をためすさうである、お前ももう十才を超えたことであるから、父の言葉をよく聞いて忘れるな、今度の合戰はまことに天下分目の戰であるが、とても勝利は覺束ない、最早わが運も盡きて討死すべき時節が來たといふものである、自分が討死したら天下は皆尊氏につくであらう、けれどもお前はどんな苦い事があつても、必ずわが後をついで忠義の旗をあげ、天子樣に奉公せよ、父への孝行は之れに越したことはない、此の短刀は天

子樣からいたゞいた誠にありがたい品であるが、今これをお前にやるから、之れを持つて河内へ歸れ』といひ聞せました。

正行は父の言葉をきいて悲しさにたへず、涙をながしながら

『お父樣が討死なさるのに、私一人國に歸ることはいやで御座います、私もお父樣と一緒に討死したう御座いますから、どうぞ戰場に連れていつて下さい』

といつて、なか〳〵歸る容子がありません、そこで正成はわざと恐しい聲で

『おろかな事をいふものではない、お前まで私と一緒に討死したら、誰れがあとに殘つて天子樣に忠義を盡すのか、私も何時までも生きてゐて御奉公したいのは山々だが、討死すべき時節が來たから仕方なく討死するのだ、其の代りお前は大きくなつて、楠の

一族を引きまとめて尊氏を滅ぼし、天子様の御心を安んじ奉り、父の仇をもとつてくれよ』

といひ聞せますと、正行もやう〳〵聞き分けて

『それなら此處から歸ります、大きくなりましたら必ず尊氏を滅ぼして、天子様を安んじ奉つり、お父さんの仇をもとります』

と答へました。

正成も喜んで

『それでこそ正成の子だ、先刻から話した事は決して忘れてはならぬぞ』

となほも深く戒しめて、すぐに馬にのつて出掛ました、正行は父上の後姿を見送つて泣いてゐましたが、家來に慰められて、やう〳〵に思ひなほしお父さんの片身の短刀を懐にして、河内を差して歸り

ました。

正行は家に歸つてお母さんに、櫻井驛でお父様から聞いたことをはなし、合戰の知せの來るのを今日か明日かとまつてをりました。すると間もなく、お父様がお叔父さんと一緒に討死したといふことがわかり、又尊氏からも正成のなきあとをとむらふやうにといつて、正成の首を送つて來ました、正行はそれを見て大層泣き悲しんでゐましたが、何を思ひ出したのか急に立ち上つて佛壇の前にかけて行きましたから、母上は不思議に思うてあとをつけて行き、そつと物蔭からのぞいて見ました。ところが正行は佛壇の前にすわり、父上から頂いて來た短刀を拔いて、今や腹を切らうとする所でありましたから、母上は驚いて正行の側に走りよつて

『これ正行何をします』

といつて短刀を奪ひとりました、正行は兩眼に涙を浮べて
『お母さま、どうぞそれを渡して下さい』
『いゝえ、なりません、お前は何と思つてそんな短氣なことをします』
『お父さまもお叔父さまも、皆討死なされましたのに、私ばかり生きてゐたとて何の役にも立ちませんから、いつそ死んでお父さまのおともを致さうと思ひます』
と申しますと、母上は
『お前はまだ子供でも、父上の子なら此の位のことは分るであらう、お父さまがお前を河内へお還しなされたのは何の爲です、お前が櫻井驛から歸つて來た時、父上の御遺言だといつて私に話たことを、わたくしはまだよく覺えてゐるのにお前はもう忘れて仕

舞つたのか、若しまだ忘れんなら、なぜそんな短氣なことをします、父上が其の短刀を下さつたのは、尊氏の首を斬れとのためでお前の腹を斬れとの爲めではない、萬が一にもお前がそんな心得違ひのことをすれば、天子様には不忠の臣となり、父上には不孝の子となつて、世間の者に笑はれるのであるぞ』
ときびしく誡めました。
正行はしばし物をもいはずに考へてゐましたが、やがて母上の前にうち伏して
『お母さま、私はあまりの悲さに思ひ迫つて、心得違をいたしました、まことに申譯がございません、これからは必ず、よくお父さまの御遺言を守つて、天子様に忠義を盡し、お父さまの仇をもむくいます』

といひましたから、母上も大層喜んで

『それでこそ父上の子である』

とほめました。

それからといふものは、正行はよく父の遺言を守つて、お母さまに心配かけることもなく、近所の子供などを集めて何時も戰爭の遊をなし、自分は大將になつて、菊水の紋のついた旗を押し立て丶、これは賊を追ふのである、これは尊氏の首を斬る所であるなど丶いつて居ましたから、母上も大層末頼しく思つてをりました。

正行は成長して楠の一族の者を率ゐて天子を守り、たび／＼賊と戰つて功名をあらはしましたが、尊氏が正行を恐れて、高師直といふ大將に何萬といふ軍勢をつけて、正行を攻めさせました時、今度こそ討死すべき時であると覺悟をさだめて吉野の宮にいつて御暇乞を

申しあげ、後醍醐天皇の御たまやにおまゐりをし、それから如意輪堂といふ社の扉に、

かへらじとかねておもへば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる

といふ歌を矢じりで書きつけ、それから手勢を率ゐて四條畷といふ處に行つて師直の大軍と戰ひ、つひに名譽の討死をいたしました。

正行はまことに君には忠義をつくし、親には孝行をつくしたものであります。四條畷神社といふのは正行を祀つた神社であります。

一休和尚幼時の頓智

（其の一）

一休和尚は應永元年の十二月廿八日、月足らずの八ヶ月で生れ、幼

名を菊丸といひましたが、生れて間もなくお母さんが死んでしまつたから、乳母の玉江といふのが育てました。玉江は顔つきが醜かつた上に色が大變黒かつたので、人々は綽名しておくろ〳〵と申しました。一休は七歳になるまでは、別段お話もありませんが、惡戲の好きなことゝいつたらそれは〳〵大變で、ある時庭へ出て雪の中をかけまはりますから、玉江も始終その後をつけてゐましたが、餘り惡戲が烈しいから

『若樣へ申し上げます、若樣貴所も七歳におなりですが、聞けば菅原道實公は七歳の時、今日のやうな雪の降る日に、御傍に居た小督を御覽じて

　降る雪が綿々ならば手に溜めて
　　小督が袖につめたくぞ思ふ

と詠まれたさうですが、貴所ももう七歳におなりですから、そんなに惡戲ばかりせずに、少しは和歌にでも御心掛けなさるがよろしいでせう』

と申しあげると

『何と申す、菅原公が歌を詠まれたと申すか、もう一度申して聞かせ』

『降る雪が綿々なれば手に溜めて
　　小督が袖につめたくぞ思ふ

と詠まれましたさうでございまする』

『なんだ、それなら麿にも出來る』

といつて

　降る雪がお白粉ならば手に溶いて

おくろが顔にぬりたくぞ思ふ

と詠まれました。

（其の二）

一休は應永七年四月八日七歳の時、京都紫野の大徳寺で、髪を剃り落して出家となり、養叟の門に入りて法號を宗純と改めました、性質が至つて怜悧でございますから、一度經文を習へば二度と聞くことはなく、聲も中々美しい、けれども惡戯の烈しいといつたら無く經文を讀み終れば庭へ飛び出して、はねまはる、木登をする、犬を引つ張つて來ては、それに乘つて駈けまはる、それは〳〵並大抵ではありませんが、覺えることはよく覺え、爲るだけのことはよくするし、師の言葉にも背きませんので、別に御叱言を頂くこともありません。或る日の事臺所の方で大な聲で

『御頼み申します〳〵』

宗純の一休は誰れかゐないか〳〵と呼んで見ましたが、生憎誰れもゐませんでしたから、自分で臺所へ行つて見ると、飴菓子を賣つてゐる門前の婆樣が、鳥籠をさげて來てゐます。

『何んだね婆樣、鳥籠などをさげて來て』

『和尚樣は御留守で御座いますか』

『ゐないよ』

『そんなら、誰れでも年をとつた御弟子の方はゐませんか』

『皆ゐないが何をするのだね、婆さん』

『私の大事な四十雀が死んでしまひましたから、和尚樣に引導を渡して貰ひに參りましたけれども……』

『さうか、そんなら婆樣私が引導を渡してやらふ』

『左樣でございますか、和尙樣は何時も貴所のことを、今に立派なものになるのだといつて、譽めていらしやいますから、貴所が引導を渡して下されば、四十雀も嘸ぞ喜ぶことでございませう、それでは宗純さんどうぞ御願ひ申します』
『よし〳〵私が引導を渡してやるから、婆樣本堂へお出で』
婆樣は喜んで本堂へゆくと、正面へ鳥籠を置いて、暫らく經文を讀んでゐましたが、やがて其の鳥籠の前に立つて
『それ萬物の長たる人間さへも五十年、汝小鳥の身を以つて四十雀とは生き過ぎた、喝』
と、引導を渡して婆樣に向ひ
『婆樣私が引導を渡してやつたから、もうこれでよろしい』
といふと、婆樣吃驚して肝をつぶしてゐる處へ、和尙が歸へつて來

られて
『宗純何をまして居る』
『只今引導を渡しました』
『何、引導を渡したと申すか、婆樣何を致した』
『お師匠樣、此の婆樣が四十雀を持つて來て、引導を渡してくれと申しますから、私が渡してやりました』
『さうか、そしてどういふ引導を渡したか』
『もう極よい引導を渡しました』
『何といつて引導を渡したか』
『それ萬物の長たる人間さへも五十年、汝小鳥の身を以つて、四十雀とは生き過ぎた、喝、と渡しました』
これを聞いて和尙は手を拍つて

『あゝ、よう出來した〳〵』
といはれましたので、婆樣は呆きれ返へつて
『まあ、和尚樣まであんなこと』
と言ひながら、すご〳〵立ち歸へりました。

（其の三）

又御師匠樣が御留守の時、門前の勘兵衞といふものが、餅をついて其の御初の大きなのを和尚樣へといつて持つて來ました、誰れもゐなかつたから宗純が受けとつて、棚へはあげたものゝ、どうも甘さうな餅なので、宗純喰ひたくて〳〵たまらず、その餅を取りおろして半分に割り、違棚から黑砂糖を取り出して黑々と餅につけて、ムシヤ〳〵と食つてゐる處へ、御師匠樣が歸つて來られたので、宗純これはしたりと、急いで食ひかけの餅を袂へかくしました。

御師匠樣はそんなことゝは夢にも知らず、自分の部屋へ這入つて見るとこれはしたり、違棚の上から疊の上まで黑砂糖だらけ、餅が半分向うに乘つてゐる、この有樣を見たお師匠樣は、宗純め、黑砂糖をつけて餅を食つたな、一つ困まらしてやらうと考へて宗純を呼びよせ
『宗純餅があるね、誰れが持つて來たかの』
『勘兵衞が持つて來ました』
『さうか、十五夜の月は眞圓なものぢやのう』
と、いひながら、宗純の顏を見ると、宗純はニッコリ笑ひながら
『雲に隱れて半分は此處にございます』
と、いつて黑砂糖のついた喰ひかけの餅を、袂から取り出しました
お師匠樣も其の頓智に感心して、何とも言はず、たゞニッコリ笑つて

居られました。

(其の四)

何をいつても宗純は怜悧で、することが實際面白いから、益々御師匠樣から可愛がられる、然る所が養叟禪師はもうお年ですから、大層衰へてまゐりました、そこで醫者の勸めで、滋養として鮭の粕漬を召しあがることになりましたが、お弟子達の前で召しあがる譯にも行きませんから、夜分お弟子達が寢靜まつてから召しあがります、すると或る夜のこと、宗純が便所へ行きますと、何處ともなく宜ひ匂ひがして來るので、宗純はあゝ宜い匂がするな、誰れが鮭を燒いてゐるぞ、變だな此の眞夜中に、寺で鮭など喰ふものはない筈だが、ことによつたらお師匠樣かも知れないぞ、と思ひながらお師匠樣の部屋の前に行つて見ると、案の條匂はお師匠樣の部屋からである、

宗純がスーッと障子を明けると、禪師は鮭の粕漬を燒いて茶漬を召しあがつてゐるから

『御師匠樣は何を召しあがつて御出でなさいます、大變宜い匂が致しますが、腥いものは喰べてはならんと、かね〳〵承はつてをりますが…………』

『これ〳〵な、年若いうちは喰べてはならんが、老人になれば喰べてもさしつかへないのだ』

『へエー、年を取りますれば喰べても仔細ございませんか』

『年をとれば精が薄くなつて、經文を讀むにも息は切れるし聲も枯れて苦しいから、滋養を專一に致さねばならぬ、若いものは勢がよいから肉を喰はんでも仔細ないが、年をとつてからは養生のためだから、別に佛罰は當らない』

『ヘヱーお師匠樣、年をとれば肉食しても、佛罰は當らないと誰れが定めたので御座いませうか』

『イヤ誰れが定めたと言ふことはないが、我は佛罰の當らんやうに引導を渡して喰ふから』

『それはどういふ引導で御座いますか、心得のためにどうぞお敎へ下さいますやうに』

『よし〳〵今敎へてやる』

と、禪師は鮭の這入つて居る皿の縁を叩いて

『汝元來枯木の如し、活さんとすれども再び水中に泳ぐ能はず、寧ろ愚僧の腹を肥やして佛果を得よ、喝、かういふ引導を渡して喰へば仔細はない』

『左樣で御座いますか』

と、いつて其の夜は其の儘自分の部屋に行つて、寢て仕舞ましたが翌朝になると宗純、臺所へ來て働くこと〳〵、やがて下男に向つて

『私がお汁の實は持つて來るから、一寸待つてくれ』

と、いひながら目笊を持つて庭へ飛び出し、泉水へ飛び込んで鯉を追ひまはし、遂に大な鯉を一尾掬ひあげ、臺所へ持つて來て俎板の上に乘せ、庖丁を持つてそれを切らふとしましたから、臺所の者どもは吃驚して早速禪師に注進に及ぶ、すると禪師は臺所に出て來られて宗純に向ひ

『これ〳〵宗純何をいたして居る』

『ヱ、御師匠樣、今日は皆の者へ養生のために、魚肉を遣はさうと存じまして』

『イヤ、どうも魚肉を喰はふなどゝは怪しからん奴だ』

『エ、私は若年で御座いますけれども、誠にどうも柔弱で御座いまして、經文を讀みますにも聲顫がしていけません故、養生のために鯉を喰べますが、然し仔細ないやうに引導を渡します』

『どういふ引導を渡すのだ』

『エ、只今其の引導を渡します』

と、いつて庖丁を執つて鯉の脊を二三度擦りながら

『汝元來生木の如し、活さんとすれば逃げんとす、再び水中に泳がんよりは、寧ろ愚僧が腹に入つて糞となれ、喝』

流石の禪師もこれには驚いて、後で

『どうも宗純には拙僧の遠く及ぶ處でない、昨夜自分が食した鮭は佛果を得ん事覺束ないけれども、宗純が食した鯉は定めて佛果を得たであらふ、あゝ、宗純は後日天晴名僧になるべきものだ』

と大層喜ばれました。

大石良雄幼時の智勇

大石良雄は備前の藩士で、一萬四千石を領した池田玄蕃の子で、兄弟が二人、兄は帶刀といひ、良雄は幼名を休馬と呼びました。どちらかといへば先づ壯健な方でしたが、差して目醒しい行もなく、ただお父さんやお母さんの命令をよく守り、仕事には眞面目でありましたが、別に武藝を好むといふでもなければ、學問が好きといふでもないが、しなければならぬことは愛憎よく勉強して、少しもなまけるといふことはなく、又人と喧嘩するでもなく、みだりに高笑するやうなこともなく、何事も控目がちの人でした。良雄が子供の時のことは、これといつて書き記した本がないので、別段御話しする

やうなこともありませんが、しかし唯一つこれだけは是非とも少年諸君に御話したいことがあります。

それは良雄が十二才の時のことですが、お父さんの主君備前公は、弓矢馬術のことは言ふも更なり、學問のことにも意を注がれ、夜も晝もそのことばかり考へてゐて、他に心を移されんから、從つて氣分が衰へて、遂には容體危い境にまで進みました、けれども醫藥を召しあがることが大の御嫌ひで、老人どもが種々心を碎いてお藥をお勸め申しても、何時もお聞き入れがなくて、一同詮方なく途方に暮るゝばかりでありました。すると或る日のこと、良雄はお父さんに向つて

『お父さん私は少し考へがありまして、主君へお藥をお勸め申して見たいと思ひますが、如何なもので御座いませうか』

とたづねますと、父は手非道くこれを叱りつけて

『なんだ、立派な老臣方が種々心を苦めても、何時もお聞き入れがないのを、まだ十二才の子供の其方が、どうしてそんなことが出來るものか、小賢しいことをいふのではない』

と一も二もなく却ぞけられました。しかしその後主君の衰弱は日に增し甚しくなるばかりでありますが、主君は矢張りお藥は一滴も口になされませんので、皆々唯手を袖にして主君の死を待つばかりでした。さうなると良雄がお父さんに、主君へお藥をお勸め申しあげて見たいといつたことが、何時とはなしに噂になつて、それならば負はれた子に淺瀬を尋ねると申す喩へもあるから、百計盡きた今日なまじひ差し止めるといふ道理もないから、兎も角良雄が目論でゐることをさせて見たらよからうといふことが、遂に藩中の話となつ

て、僅か十二才の小供の良雄が、主君の前に出でお藥をお勸め申すことになりました。

そこで胸に覺悟のある良雄は、早速御前に伺候して、おめずおそれず

『申しあげまする、我が君には好ませ給ふ學問にばかりお耽りなされ、それがために、お身を傷はせられて、皆々一方ならず心配して居りまする、然るに承はりますれば我が君には、如何ほどお藥をお勸め申しあげても、一向御聞き入れがなく、たゞ天命に任するとばかり仰せなさるさうで御座いますが、それは我が君の御行狀とも覺えません、何卒御心を替へさせられて、御療養の程願はしう御座います』

と、子供ながらも眞心籠めて申しあげますと、主君はニッコリ御笑

ひになつて

『其方はなか〳〵小賢しいことをいふ、なれどよく〳〵考へて置けよ、人の生命には限のあるものである、かね〴〵養生を怠らないで、ゐてそれで病氣の爲に死するのは如何とも致し方はない、此の道理を辨へずに神や佛に祈つたり、醫藥を飲んだりするのは物の道理のわからん者共のすることぞ、決して大丈夫のなすべきことではない、それ故誰れが勸めても、醫療は加へないのであるぞ』

と、仰せられると、良雄は膝を進ませて

『御言葉に返へし言致しまするは、誠に恐れ多いことで御座いますけれども、我が君の御言葉は道理に違つて居るやうに思はれます、何卒今一度御考へなほしあそばしますやうに』

と言葉を盡して言上致しますと、主君は、うるさい奴だな、一つ脅かして退出させやうと御考へなさつて、枕刀を引きよせながら

『最早用はないから退出致せ、此の上余の言葉を返へすに於ては斬つて捨てるから左樣心得よ』

良雄は退出するかと思ひのほか、中々屈服せず

『我が君は御病體であらせられます、子供では御座いますれど壯健の某を、御手打になること、さう／＼容易くは御座いますまい』

如何にも嘲るがやうな口ぶりで申し上げますと、短慮の主君以つての外に御憤りなさつて

『よし其の舌の根を止めてくれん』

と、矢庭に枕刀引き拔いて切りつけ給ふを、ヒラリと身をかはして庭先へ飛び下りた良雄、築山にかけあがつて燈籠の蔭や、松の蔭

を、彼方に隱れ此方に逃げして、やゝ半時ばかりの間逃げまはりますと、御病體の主君は非道くお疲になり、ドットばかり庭上にお倒れになつて

『水を持て／＼』

良雄は喜んで奥座敷に走り入り、大な茶碗にお薬をもり

『水を持つてまゐりました』

と差し出しますと、主君は續け樣に三碗ばかりお飲みになりました

そこで良雄は兩手をついて

『此の上は如何やうの御仕置を蒙りますとも、いさゝか心殘りは御座いません、我が君には只今お薬を召しあがりになりましたれば、御快氣は程ないことで御座いませう、たゞお薬を差しあげたいばかりに、かりそめにも君を計り申しました不埒の罪は迚も逭

れません、イザ首を召されませ』
と、落ちつきはらつて述べましたれば、流石の君も感心なされ、御手打どころか却つて褒美として、五百石を下し給ひました。
良雄は子供の時からこれほどの智惠があり、勇氣があり、君を思ふ眞心があつたればこそ、長い年月あらゆる艱難辛苦して、遂に主君の遺志をはたすことが出來たのであります。

ガーフヰールドの幼時

ゼームス、エ、ガーフヰールドは、西暦千八百三十一年十一月十九日、我が天保二年北米合衆國オハイオ州の、オレンヂといふ原野のあたり物淋しい林の中の、細い丸木小屋の中で生れました。うちが大變貧乏であつた上に、三才の時にお父さんが死んでしまつたので、

親子五人は舵をなくした舟の樣に、哀れな有樣になりました。それでお母さんは或る時は子供に隱くして、朝食と晝食とを食はずに、一日僅かに一度の食事をして數ヶ月を過した事もあります。ガーフヰールドは子供の時から大變に利發でしたが、お母さんがゑらい人でしたから、かね〴〵

『ゼームスよ、お前のお父さんは、かね〴〵意思のある所には必ず道がある、と仰せられた、何事でも一度成し遂げやうと決心すれば、それからどうしたらよからうと迷ふ時でも、必ずあり〳〵と道がわかつて、何事でもなし遂げられるものであるから、人は決して他人にたのまず、何んでも自分の力を賴むのが肝要です、お前も天は自ら助くるものを助く、といふ格言をお知りだらうから、自分で一生懸命に勉め勵みさへすれば、天の神樣は必ずお前

を助けて下さる』

と言ひ聞かせましたから、ゼームスはよくお母さんのいひつけを守つて、或る時は子供ながらも大工に傭はれ、或る時は製鹽場に傭はれ、又或る時は學僕ともなつて、勉強しましたから、後には數多い北米合衆國の三大統領と、いはるゝまで立派な人間になりました。

或る時ゼームスは一人の朋友と、小屋の中で鷄の卵を捜してゐました、ところが朋友は一つの大な卵を見つけて

『ゼームスよ、お前はこの卵を呑むことが出來るか』

と言ひました、ゼームスはこれまで、卵をそのまゝ丸呑みしたことが無いので、正直に

『僕は呑むことは出來ないや』

と答へました、すると朋友は

『何んだ、ほかの朋友は皆呑むことが出來るに、お前ばかり呑むことが出來ないのか、女々しいね』

と言つて笑ひましたから、ゼームスはほかの朋友が出來ると言ふのに、自分ばかり出來ないはづは無いと考へ、すぐに其卵を手に取つて口に入れやうとしましたが、卵が大きくて口に入りませんでしたから、急いで自分の家に走せ歸り、少しばかりのパンを持つて來てそれと共に卵をかみくだいて呑みました、そして如何にも嬉しさうに

『僕も卵を呑むことが出來たぞ』

と叫びました。

十歳ばかりの時、或る日學校で綴り方の試驗がありました、ところが其の隣席にゐた姪のヘンリーは、それを知らないで、たゞ顏を眞

赤にしてゐたので、ゼームスは氣の毒に思つて、そつと文字の綴り方を敎へてやりました、先生はこれを見付て二人に向ひ

『あなた方は學校の規則を破りましたから、これから敎場を出て家にお歸りなさい』

と命じましたから、二人は驚いて暫時の間はたゞぼんやりしてゐましたが、ゼームスは何を考へたのか、急いで敎場を出て、自分の家まで行き、そのまゝ引きかへして學校に行き、敎場には入つて元のやうに自分の席につきましたから、先生は

『何故あなたは私の言葉を用ひませんか』

と叱りつけました。するとゼームスは

『私は先生の言葉に從うて一旦家に歸り、又出直して來たのです』

と答へましたから、先生も其の利口なのに感心して仕舞ひました。

又或る時、兄のトーマスが出稼からいくらかの金を持つて歸つたのを幸ひ、丸木小屋が破れて雨露を凌ぐことが出來なくなつて居るので、一つ小奇麗な二階家を建てやうと言ふので、近い村から大工を雇うて工事に取りかゝりました。その時ゼームスは毎日大工の手傳をして働いてゐましたが、大工の仕事が面白いので、何時の間にか稽古が行つて、家の出來上る頃には中々上手になつたので、大工も大變感心しました。ゼームスは子供心にも、行々は自分も大工になつて生計を立てやうと朝夕其の事を考へてゐましたが、ある日のことお母さんに向つて

『お母さん、私は金儲の法を考へつきました』

と言ひましたから、お母さんは笑ひながら

『なに、金儲の法を考へつきましたと、それはどうするのです』

と聞きますとゼームスは眞面目になつて
『それはほかではありません、私は大工に傭はれて金儲をしやうと思ひます』
と答へました、お母さんは眉をひそめて
『それはい丶思ひつきだけれども、お前はまだ年が若いし、それに農事が急がしいから、迚もそんなことは出來ますまい』
と言つて止めましたが、ゼームスは熱心に
『けれどもお母さん、意志のある所必ず道があるといふではありませんか』
と言つて少しも思ひとまる樣子がありませんでしたから、お母さんは又笑ひながら
『そんなら、お前の考へ通りして御覽よ』

と言ひました、これを聞いてゼームスは大變喜び勇み、先日の大工の所に行つてその由を語りましたから、大工も其の志を感じ、快く承諾して一枚について一錢の割りで、板を削ることを命じました。
ゼームスはその翌日早く起きて大工の家にゆき、一枚でも澤山削らふと一生懸命に働きましたから、日の入る頃には百枚の板を削りました、大工はこれを見て益感心し、約束通り百枚分一圓渡しました、生れてから一圓といふ大金を儲けたことの無いゼームスは、天にも昇る心地で急いで自分の家に歸り、お母さんの膝の上にその金を投げ出して
『お母さん、今日は一圓儲けました』
と言ひましたから、そんなこと丶は夢にも思はなかつたお母さんは今更ゼームスの働きに感心して、暫しは物をも言はず、ゼームスの

背に顔を押しあてゝ、嬉し泣きに泣きました。

宮本武藏幼時の惡戯

二刀流の元祖宮本武藏は、足利十三代將軍義輝公の家來、自劍流の達人で世に並びなき英傑なりとあつて、將軍より無二齋の號を賜はつたと申す吉岡太郎左衞門無二齋の二男で、幼名は七之助、性質が怜悧で活潑で、成長するに從つて其の成すところ大人も及ばず、父の敎へを受けて驚くばかりの劍術の早技、父も喜んで末賴もしい奴と精神を込めて敎へると、七之助十三才にもなれば腕前のある處から、自然と慢心を起して人を侮り、喧嘩を好み、近所の子供等をいぢめ、我が儘勝手の振舞があるので、父も之を心配して時々は意見を加へましたが、七之助些しも聞かず益々我が儘が增長するばかりで

ある。父は折を見て嚴しく意見を加へやうと、一時其の儘に打ち捨てておきましたが、或る日の事父の無二齋、庭へ出て手裡劍を打て慰さんで居りますと、後ろの方に蹲んで見てゐた七之助、どうしたはづみか父の手元が狂うて、たつた一本的をはづれたのを見るや否や

『アハヽヽ……………』

と大聲で笑ひましたから、何時か折を見て意見しやうと思うてゐた父は、此の時こそと

『己れ憎い奴、子供の癖に父を嘲り笑ふとは不屆千萬、日頃の意見も聞き入れずに、益々我が儘增長しをる、今一度笑つて見よ、其の儘にては捨て置かんぞ』

と叱りつけると七之助、平氣な顔で

『親父樣御腹立なさいますな、親父さんほどの人が僅かの間の的

を、お外しなさつたのが可笑しうて、思はず高笑ひ致しました、アハヽ………………』

と又一層な大聲で笑ひましたから、無二齋火のやうに怒つて

『己れ口の減らぬ奴、子とて免さぬ覺悟をせよ』

と、一刀引き拔き切りつくるを七之助、早くも身をかはして刄の下をくゞり、父の後ろへ突つ立つたから、父は愈怒つて此度こそはと切りつくる、七之助は眞二つと思ひのほか、飛鳥の如く身を躍らせて垣根を飛び越え、後をも見ずに逸參走り、香勝寺の叔父の處へ逃げ込んで、そこで父の機嫌の直るまで叔父について學問する事になりました。

七之助は叔父の處で頻りに漢學を學びます、固より怜悧な子供で、一度習へば忘るゝといふことはありませんから、叔父も大いに喜ん

で毎日休まず敎へて居ります。すると或る日の事、叔父の使に姫路の城下まで參つた七之助、其の頃姫路に來て町道場を開いて居る、有馬喜平治一陽軒信賢といふ、有馬流劍道の達人の表に、日下開山劍法之元祖と金字で書た大看板が懸つて居るのを見て大いに笑ひ

『此の奴、此んな町道場位を開いてる癖に、日下開山劍法の元祖などゝは生意氣な奴だ、よし乃公が看板を塗りつぶしてやらう』

と、よせばよいのに惡戲好きな七之助、天水桶にのつて矢立の筆を取り出し、看板の金字の上にズーッと棒を引いて、其の脇へ

『井の中の蛙大海を知らず、筆者野村香勝寺内吉岡七之助』

と書いておきました。

後でこれを見た喜平次大いに立腹し、

『これは怪しからん奴だ、これ齋藤お前その香勝寺へ行つて、七

之助といふ奴を引き捕へて來てくれ、眞劍の勝負をして此の恥を雪がねばならぬ』

といふので、弟子の齋藤が早速香勝寺へいつて、住持に交渉すると七之助は當年漸やく十三歳の子供であるといふとがわかつたので、喜平次も張合拔がしたものゝ、世間の人々は其の筆者が、小供であるか狂人であるか知らんから、たゞその儘でおいては、喜平次は恐れて看板を引込ましたといはれては名の汚れになるからといふので香勝寺へは

『後日のため七之助殿へ意見を加へ、尚ほ世の禮法をもお敎へ申したいから、明日午の刻に、御住持同道にて當道場へお出で下さるやうに』

と使をやり、又道場の前には

『一、野村香勝寺内吉岡七之助なる者、當道場に揭ぐる看板に樂書致候段、獨り此方の名義を汚すのみならず、當流の名折にも相成候につき先方へ掛合候處、同人義當年十三歳にして取に足らざる者にて、深く後悔に及び且同人親族より敎訓有之度き旨懇望に依り、今日午の刻當所に於て敎導可致者也』

といふ張札を出しました。近傍の者之を聞き傳へ早や午の刻前よりドヤ／＼と押寄せて、どんな事をするのかと皆／＼待ち構へて居ります。すると香勝寺の住持が七之助を連れて來ましたから喜平次は七之助に向ひ

『お前が七之助であるか、惡戯をしさうな面色だな是へまゐれ、七之助其方當道場の看板に樂書いたせし事、誠に不屆至極なれども未だ子供であつて見れば、惡るい心でしたのではあるまいと思

ふから此の度は免してやるが、これからキット愼しんで決してあのやうな悪戯をしてはならんぞ、若し二度とあんなことをしたらば、ほかの子供の見せしめのために、一刀の下に切て捨るから左樣心得よ、其の方は劍道も少しは學んださうだが何流を習つたか太刀筋を見てやる』

と言ひましたから、先の程から此の老人め何を傲慢なことをぬかすか、叔父さんに引張れて此處まで來たのが馬鹿〳〵しかつたワイ、と考へてゐた七之助、

『如何にも御のぞみとあらば手並の程を見せ申さう』

と、いひながら突然懷に隱してゐた一尺二寸の木劍を取り出すが早いか、喜平次に飛びかゝつて其の眉間を、ポカーリと打ちましたから、何かは以つて堪りませう、喜平次はドッと倒れて其のまゝ死

んでしまひました。

これを見た喜平次の門弟達

『それ狼藉者にがすな』

と、いふ間もなく七之助は、そばにゐた叔父さんを脊負つて飛鳥の如くににげだし、肥後の國熊本の城主加藤主計頭清正の家來、宮本武左衞門といふ武士にたすけられ、遂に其の人の養子となりました。

荒木又右衞門幼時の沈勇

荒木又右衞門は劍術の達人で、武勇のほまれの高い人であります。子供の頃一人の友達と一緒に、遠い山に鳥をとりに行きました、彼處此處とたづねまはつて、暮れ方に二人は歸り途につきましたが、大層さびしい處に來ましたから、又右衞門は友達にむかつて

『此の邊は淋しい處で不用心だから、外の道を通つて歸らうではないか』

といひました、友達は之を聞いて

『此のやうな淋しい處を通るのが、却つて面白いではないか、君は臆病でこまる』

と、いつて笑ひながら先きにたつて、歩いて行きました。

やがて二人は近邊に人家もなく、人通りもなく、樹木は生ひ茂つて道はくらく、谷は深くて水音物すごい處に行きました、そこで又右衞門は又友達に向つて

『若し此の邊で山賊に出逢たらどうするか』

と、たづねますと、友達はあざわらつて

『君はまだそんなことをいふのか、誠に氣の弱い男だね、山賊に

出逢たからとて、別に恐ろしいこともあるまい、僕は却つて山賊にでも出逢ば面白いと思つて居る』

と、いひました。それからまた少し行くと、暗い森の處を出ましたが、何んだか道の下の方に怪しい物音がします、不思議だと思つてよく見ますと、一人の山賊が岩穴のなかにねてゐて、その怪しい物音は山賊の鼾の音でした、又右衞門が

『あれ見たまへ、あの岩穴に山賊がねてゐるではないか』

といひますと、友達は

『なるほど山賊がねてゐるやうだね、一つ僕が小便しかけてあれを驚かしてやらう』

と、いつてその岩の上にいつて、小便をしかけました。賊は吃驚して起きあがつて巖の上をみると、子供が二人たつてゐるので

『お前達はなか〳〵大膽な小供達だね、私はながい間おひはぎをしてゐるが、まだお前達のやうな膽玉の大きい者をみたことはない、此れから城下まではまだ餘程あるから、私がそこらまで送つてあげやう』

といつて、二人の後からついて行きますると、暫くすると一人の子供が山姥の曲を謠ひだしました。然し二三句謠ふと語か塞つて聲もふるひだしましたので、賊は大聲あげて笑ひながらその子供にむかつて

『なんだつまらない、お前の元氣はほんのうはべばかりの、つけ元氣だ、馬鹿〳〵しい』

と、いひ又又右衛門に向つて

『お前の元氣はほんとの元氣だ、私がお前達の後をつけて來たの

は、たゞお前がどんな子供だかを、みとゞけたいばかりであつた、あの子のきついのは唯口ばかりで、眞のきついといふものではない、あんな、から元氣で威張つたつて役にたつものではないが、お前はほんとにえらいものだ』

と、いつて大層ほめました。

又右衛門はのち、柳生但馬守や、宮本無三四等の名高い劍術の先生方について劍術を習ひ、その極意を極めました。

橋本左内幼時の啓發錄

橋本左内は橋本長綱の長男で、天保五年三月十一日、越前國福井市常盤木町で生れました、體質極めて弱く、性質また甚だ温柔で口數が至つて少なく、隨つて人と喧嘩などしたことはありませんでした

が、紙鳶を揚ぐることが大好きで、何時も召し使の男に紙鳶を揚げさして、それが高く揚るのを見て何よりの樂みとしてをりました。ある日例の如く紙鳶をあげてよろこんでゐますと、何處かの惡戯子供が、自分の紙鳶を以て左内の紙鳶をからめてしまはふとしましたから、左内は小刀を引き拔いて、自分の紙鳶の糸を斷ち切つてしまひました。これでも左内が人とあらそひを好まなかつたことがわかるではありませんか。

左内は七才の時から書物を習ひはじめましたが、學問にはなか〳〵熱心で、夜晝のわかちなく、眠食を忘れて勉強しました、ある時越前で名高い萬歳の舞が、左内のうちであつたときも、左内は獨り自分の書齋に閉ぢこもつて、一心に書物を讀んでをりました。

またある時お父さんと一緒に、當時福井藩の典醫半井仲庵のうちに

蘭學の講義を聞きにゆき、熱心に聞いてゐましたが、その講義がすんでのち仲庵に向ひ

『どうか次の講義のある日まで、其の蘭書を見せて下さいませんか』

と懇望しましたが、時に左内は未だ十才にもならんほどでしたから仲庵は心のうちに『なんだこの小僧、生意氣なことを言ふ奴だな』と思つて、書物を貸すことを斷はりました。けれども左内は再三懇望してやまなかつたので、仲庵もその熱心な容子を見て、遂にその蘭書を貸てやりました。

期日になつて左内は約束通りその書物を返へしましたが、仲庵は左内が讀むことが出來たか、どうか怪しいと思つて

『どうだ左内讀むことが出來たかな』

とたづねますと左內は

『御蔭樣で讀むことが出來ました』

と答へましたが、仲庵は尙ほおやしいと考へて、その日講義のあるところのことを色々とたづねてみますと、これは不思議と思ふばかり、問に應じて流るゝやうに答へますから、仲庵は大きに驚いてその故をたづねますと

『先達うちに歸りましてすぐ、お母さんにせまつて辭書を一冊買つて貰ひ、それを便にして勉强し、遂に本日までに半分ほど讀みました』

との左內の答へに、仲庵は益々驚き、その學問に熱心なのを賞讃し、遂にその蘭書を左內に與へました。

左內は其の後藩の儒者吉田東篁について經史を學び、學識愈々進んで

その名は藩主、松平春嶽公にまできこえ、公の襃辭をいたゞくことになりましたが、十五歳の時『啓發錄』といふものを著はしました。

啓　發　錄

去稚心

稚心とは、をさな心といふ事にて、俗にいふわらべらしきことなり、菓菜の類のいまだ熟せざるをも稚といふ。稚とはすべて水くさき處ありて、物の熟して旨き味のなきを申也。何によらず、稚といふことを離れぬ間は、物の成り揚る事なきなり。人にありては竹馬、紙鳶、打毬の遊びを好み、或は石を投げ、蟲を捕ふを樂み、或は糖菓、蔬菜、甘旨の食物を貪り、怠惰安佚に耽り、父母の目を竊み、藝業職務を懈り、或は父母によりかゝる心を起し、

或は父兄の嚴を憚りて、兎角母の膝下に近づき隱るゝ事を欲する類ひ、皆兒童の間は强て責むるに足らねども、十三四にも成り學問に志し候上にて、此の心毛ほども殘り有之時は何事も上達致さず、迚も天下の大豪傑と成る事は叶はぬ物にて候。源平の頃並に元龜、天正の間迄は、隨分十二三歳にて母に訣れ、父に暇乞して初陣など致し、手柄功名を顯し候人物も有之候。此等はみな稚心なき故なり。もし稚心あれば、親の臂の元より一寸も離れ候事は相成間敷、まして手柄功名を立つべきよしはこれなき義なり。且又稚心の害ある譯は、稚心を除かぬ時は、志氣振はぬものにて、いつまでも腰拔士になり居り候ものにて候。故に余稚心を去るを以って、士の道に入る始と存候なり。

振氣

氣とは、人に負けぬ心立ありて、耻辱のことを無念に思ふ處より起る意氣張の事也。振とは折角自分と心をとゞめて、振立振起し、心のなまり油斷せぬ樣に致す義なり。此の氣は生ある者には皆あるものにて、禽獸にさへ之ありて禽獸にても甚だしく氣の立たる時は人を害し、人を苦しむることあり。まして人に於てをや。人の中にても士は一番此の氣强く有之故、世俗にこれを士氣と唱へ、いかほど年若な者にても、兩刀を帶したる者に不禮を不致は此の士氣に畏候事にて、其人の武藝や力量や位職のみに畏れ候にてはこれなし。然る處太平久敷打續、士風柔弱佞媚に陷り、武門に生れながら武道を忘却致し・位を望み、女色を好み、利に走り勢に附く事のみにふけり候處より、右の人に負けぬ耻辱のことは堪へぬと申す雄々しき丈夫の心くだけなまりて、腰にこそ兩刀

を帶すれ、太物包をかつぎたる商人、樽を荷ひたる樽ひろひよりもおとりて、纔に雷の聲を聞き、犬の吠るを聞ても卻歩することゝは成にけり。偖々可歎至にこそ、しかるに、今の世にても猶未だ士を尊び、町人、百姓抔御士樣と申し唱ふるは、全く士の士〱たる處を貴び候にては無之我が君の御威光に畏服致し居候故、無據貌のみを敬ひ候ことなり。其の證據は、むかし士は平常は、鋤鍬持土くじり致し居候得共、不斷に耻辱を知り、人の下に屈せず、心逞しき者ゆゑ、まさか事ある時は、吾大御帝或は將軍家抔より召寄せられ候へば、忽鋤鍬うち擲て物の具を帶して、千百人の長となり、虎の如く狼の如き軍兵ばらを指揮して、臂の指を使ふごとく致し、事成れば芳名を青史に垂れ、事敗るれば屍を原野に暴し、富貴利達死生患難を

以て其の心をかへ申さぬ大勇猛大剛强の處有之故、人々其心に感じ其の義勇に畏候へども、今の士は勇なし、義は薄し、謀略は足らず、迚も千兵万馬の中に切り入り、縱橫無碍に驅廻ることはかなふまじ。況んや帷幄の內に在て、運籌決勝の大勳は望むべきところにあらず。さすれば、若し腰の兩刀を奪ひ取り候へば其心立其分別、盡く町人百姓の上には出で申すまじ。百姓は平生骨折を致し居、町人は常に職業渡世に心を用ひ居候ゆゑ、今若し天下に事あらば、手柄功名は却つて百姓町人より出で、福島左衞門太夫、片桐助作、伊井直政、本多忠勝等の如き者は、士より出で申さゞるかと思はれ、誠に嘆かはしく存る。箇樣に覺えのなきものに高祿重役を被下、平生安樂に被成置き候は、偖々君恩のほど申す限りなきこと、辭には盡しがたし。其御高恩を蒙むりなが

ら、不覺の士のみにて、まさかのときに我君の耻辱をさせ申し候ては、返す〴〵恐入候次第にて、實に寢ても目も合はず、喰ても食の咽に通ふべき筈にあらず。ことさら我先祖は國家へ對し奉つり聊の功も可有之候へども、其後の代々に至りては、皆々手柄なしに恩祿に浴し居り候義に候へば、吾々共聊にても學問の筋心掛、忠義の片端も小耳に挾み候上は、何とぞ一生の中に、粉骨碎身して、露滴ほどにても御恩に報い度事に候。此忠義の心を撓まさず、引立後還り致さぬ樣に致し候は、全く右の士氣を引立振起し、人の下に安せぬと申す事を忘れぬこと肝要に候。乍去只此氣の振立候而已にて志立ぬ時は折節氷の解け醉のさむる如く、後還り致す事之有候故に、氣一旦振立候へば方に志立候事 甚 大切なり。

立志

志とは心のゆくところにして、我こゝろの向ひ趣き候處をいふ。士に生れて忠孝の心なき者は、若忠孝の心有之候て我君は御大事にて我親は大切なる者と申す事、聊にても合點致居候はゞ、必ず我身を愛重して、何とぞ我こそ弓馬文學の道に達し、古來の聖賢君子英雄豪傑の如く相成り、君の御爲を働き、天下國家の御利益にも相成候大業を起し、親の名までも揚て、醉生夢死の者にはなるまじと、直に思付候者にて、此 即 志 の發する所也。志を立つる時は、此心の向ふ所を急度相定め一度右の如く思詰候へば、彌切に其向を立て、常々其心持ちを失はぬ樣に物にたえ候事にて候。凡 志 と申すは書物にて大に發明致し候か、或は師友の講究により候か、或は自分患難憂苦に迫り候か、或は憤激發勵致し候

かの處より立ち定まり候者にて、平生安樂無事に致し居り、心のたるみ居候時に立事はなし、志なき者は魂なき蟲に同じ。何時迄立ち候ても丈ののぶる事なし志一度相立候へば、其以後は日夜逐々成長致し行き候者にて萠芽の草に膏壤をあたへたるが如し。古より俊傑の士と申候人とて目四つ口二つ有之にてはなし、皆其志大なると逞まじきとにより遂には天下に大名を揚候なり、世上の人多く碌々にて相果候は、他にあらず、其志太く逞ましからぬ故なり。　志立たる者は、恰も江戸立を定めたる人の如し、今朝一度御城下を踏み出し候へば、今晩は、今莊、明夜は木の本と申す樣に、逐々先へ〳〵と進み行申候者也。譬へば聖賢豪傑の地位は江戸の如し、今日聖賢豪傑に成らん者と志ざし候はゞ、明日明後日と段々に其聖賢豪傑に似合ざる處を取去り候はゞ、如何程短

才劣識にても、遂には聖賢豪傑に至らぬと申す理はこれなし。丁度足弱な者でも一度江戸行き極め候上は、竟には江戸まで到着すると同じき事なり。偖右樣志を立候には物の筋多くなることを嫌ひ候。我心は一筋に取極め置き不申候はでは、戸じまりなき家の番するごとく、盜人や犬が方々より忍び入り、迚も我一人にては番は出來ぬなり。また家の番人は隨分傭人も出來候得共、心の番人は傭人出來不申候、さすれば自分の心を一筋に致し、守りよくすべき事にこそ。兎角少年の中は、人々のなす事致す事に目がちり、心が迷ひ候て、人が詩を作れば詩、文かけば文、武藝とても朋友に鎗を精出す者あれば、我今日迄習居たる大刀業を止て、鎗と申す樣に成り度き者にて、之は、正覺取らぬ第一の病根なり。故に先づ我智識聊にても開候はゞ、篤と我心に計吾所向所爲をさ

だめ、其上にて師につき、友に謀り、吾及ばず足らはぬ處を補ひ其極めおきたる處に心を定めて、必多端に流れて多岐亡羊の失ひなからんことと願はしく候。凡て心の迷ふは心の幾筋にも分れ候處より起り候事にて、心の紛亂致し候は、吾志未だ一定せぬ故なり志定まらず、心收まらずては、聖賢豪傑には成れぬものにて候。何分志を立つる近道は、經書又は歴史の中にて吾心に大いに感徹致し候處を書拔き壁に貼り置き候か、又は扇杯に認め置き日夜朝暮夫を認め、詠め、吾身を省察して、其不及を勉め、其進を樂み居り候事肝要にして、志既に立候時は學を勉むる事なければ、志彌ふかく逞しくならずして、動もすれば、聰明は前時より滅じ道德は初の心に慚る樣に成り行くものにて候。

勉學

學とはならふと申す事にて、總てよき人勝れたる人の善き行ひ善き事業を迹付して習ひ參るをいふ。故に忠義孝行の事を見ては直ちに其人の忠義孝行の所爲を慕ひ倣ひ、吾も急度其人の忠義孝行に負けず、劣らず勉め行き候事、學の第一義なり。然るを後世に至り字義を誤り詩文や、讀書を學ぶと心得候は可笑しき事どもなり、詩文や讀書は右學問の具と申す者にて、刀の欛鞘や二階梯の如き者なり、詩文や讀書を學問と心得候は恰も欛鞘を刀と心得、階梯を二階と存候と同じ、淺鹵粗麤の至りにて候。學問と申すは忠孝の節と文武の業とより外には無之、君に忠を竭し、親に孝を盡すの眞心を以つて、文武の事を骨折勉强致し、御治世の時には御側に被召使候へば、君の御過ちを補ひ匡し、御德を彌增に盛んになし奉り、御役人と成り候時は其役所役所の事、首尾能取修め

依估贔負不致、賄賂請謁を下受、公平廉直にして、其一局何れも其威に畏れ其德に懷き候程の仕業をなし可申義を、平生に心掛け居り、不幸にして亂世に逢ひ候はゞ、各々我居場所の任を果して寇賊を討平げ、禍亂を克定不可、或は大刀鎗の功名組打の手柄致し、或は陣屋の中にありて、謀略を贊畫して敵を鏖にし、或は兵糧小荷駄の奉行となりて萬兵の飢渇不致、兵力の不減樣に心配致し候事抔、兼々修練可致義に候。此等の事を致し候には、胸に古今を包み腹に形勢機略を暗じ藏め居らずしては叶ぬ事共多く候へば、學問を專務として勉め行ふべきは、讀書して吾智識を明かに致し、吾心膽を練り候事肝要に候。然る處少年の間は兎角打續き業に就き居候ことを厭ひ、忽讀忽廢し、忽習文忽講武といふ樣に、暫く宛にて倦怠致すものなり、此甚不宜。勉と申すは力を推究め、打續き推遂候處の氣味有之字にて、何分久を積み、思を詰不申候はでは、萬事功は見え不申候。まして學問は物の理を說き、筋を明にする義に候へば、右の如く輕忽粗驫の致し方にて、眞の道義は見え不申、中々着實の學問にはなり申さぬなり。且又世間には、愚俗多く候故、學問を致し候と、兎角驕慢の心起り、浮調子に成て、或は功名富貴に念動き、或は才氣聰明に伐り度病折々出來候ものにて候。これを自ら愼み可申は勿論に候へども、玆には良友の規箴至て肝要に候間、何分交友を擇み、君仁を輔け、吾德を足し候工夫可有之候。

擇朋友

交友は吾連朋友のことにて、擇とはすぐり出す意なり。吾同門同里の人同年輩の人、吾と交りくれ候へば、何れも大切にすべし。

乍去其中に損友益友候へば、則ち擇と申す事肝要なり。損友は吾に得たる道を以て、人其不正を矯正し可遣、益友は吾より親を求め、事を諭り、常に兄弟の如くすべし、世の中に益友ほど難有難得者はなく候間、一人にても有之ば、何分大切にすべし、總て友に交はるには、飯食歡娯の上にて附合、遊山釣魚にて狎合は不宜學問の講究、武事の練習士たる志の研究心合の吟味より、交を納れ可申事に候。飲食遊山にて狎合候朋友は、其平生は腕を扼り肩を拍ち、互に知己と稱し居候へ共、無事の時吾德を補なふに足らず、有事の時吾危難を救ひくれ候者にてはなし。これは成丈屢出會不致、吾身を嚴重に致し附合候て、必ず狎昵致し吾道を褻さぬ樣にして、何とか工夫を凝して其者を正道に導き、武道學問の筋勸め込候事、友道なり、偖益友と申すは、兎角氣遣な物にて

折々不面白事有之候。夫を篤と了簡致すべし。益友の吾身に補ひあるは全く其氣遣な處にて候、士有爭友 雖無道 不失餘名と申す事經に有之候、爭友とは即益友なり。吾過を告知せ、我を規彈致しくれ候てこそ、吾氣の附ぬ處の落も欠も補ひたし候事相叶候なり。若右の益友の異見を嫌ひ候時は天子諸侯にして諫臣を御疎みなされ候同樣にて、遂には刑戮にも罹り不側の禍をも招く事あるべきなり。偖て益友の見立方は其人剛正毅直なるか温良篤實なるが、豪壯英果なるか、俊邁亮明なるか、調達大度なるか、の五つに出でず。此等は何れも氣遣多き人にて世間の俗人どもは甚しく厭棄致し居候者なり。彼損友は佞柔善媚阿諛逢迎を旨として、浮躁辨慧輕忽組慢の性質ある者なり。此は何れも心安くなり易き人にて、世間の女子小人ども其才智や人品を譽め居候者なれ

ども聖賢豪傑たらんと思ふ者は、其所擇自ら在る所あるべし
以上五目少年學に入るの門戶とこゝろえ、書聯申候者也。右全く嚴父の敎を受け、常に書史に涉り候處性質疎直にして柔慢なる故遂に進學の期なき樣に存じ、每夜臥衾中にて涕泗にむせび何とぞして吾身を立て、父母の名を顯し、行々吾身に解得致し候事ども有之候樣覺え申すに付き聊か書記し後日の遺忘に備ふ。敢て人に示す處にあらず。嗚呼、如何せん吾身刀圭の家に生れ、賤技に局く々として吾幼年の志を遂ぐる事を不得、然れども所業は此に有りても、所志は彼に有り候へば、後世吾心を知り、吾心を憐み、吾道を信ずる者ある歟。

左内は後父の業を繼いで藩の典醫となりましたが、後藩主松平春嶽公に用ひられ、西鄕南洲や、吉田松陰や、武田耕雲齋などと交を結び、大ひに國事に奔走しましたが、僅か二十六歲を一期として、可惜有爲の才を抱きながら空しく伊井直弼のために殺されましたのは、まことに惜しみてもなほ餘りある次第であります。

鎭西八郎爲朝幼時の不敵

鎭西八郎爲朝は六條判官源爲義の八男で、身の丈は七尺、目はギラ〳〵と光り、膂力人に勝れて强弓を引き、矢繼早の手きき、それに左の手は右の手よりも四寸程長いので、それほど矢束の長い矢を引けるし、おまけに智慧も勇氣も人並すぐれて居る處から、幼少の時より大膽不敵で、多くの兄達にも負けることなく、何事も自分氣儘に振舞うて、傍若無人の腕白もの、道理に合はぬことはどんな人にでも屈することなく、それを挫がねば承知せぬといふ剛の者であ

りました。

十三才になると體格は大人の如く、力は強くて九石の弓をば何の苦もなく滿月のやうに引つ張る大力に、父の爲義を始め義朝以下の兄達も、皆舌を卷いて感心してゐましたが、父の爲義は親だけに、八郎は行末どんなことを仕出かすことかと心配して、色々樣々と戒めましたが、腕白あがりの八郎は父の戒を物とも思はず、我れこそは天下に敵無き大力の者であると堅く信じてゐるので、世の中に恐ろしいものはなく、益々我が儘が募つて、唯れ憚らぬ大膽不敵の剛情者となりました。或る日のこと、白河御所では例の如く、少納言入道信西を請じて、韓非子の講釋をお聞きになりましたが、

『何時もつれ〴〵であるから何人を召し具しても差し障ない』

との御意であつたので、爲義は餘り學問のない八郎を伴れて行つて

その講義を聽かせやうと思つて、衣服を着替さして從者のやうにし一緒に御所に參つて御階の下に打ち伏して、遙かに殿上なる信西の講義を聽いて居りました。すると信西は今の世の中に自分よりほかには學者はない、といふやうな振舞で、如何にも傲慢に講釋するのを、十三の少年ながらも八郎は、心竊かに憤つては居るものの、御前ではあり、信西は年たけた學者であるから、ヂッと息を凝らして忍へてをりました。

やがてその日の講釋のすんでから、上皇は信西に向つて

『昔の人の中で强弓の達人は誰れであらふ』

とおたづねになると、信西は

『吉備臣尾越、盾人宿禰の二人に及ぶ者はありません』

とお答へする、

『さらば今の世では』
と重ねておききになると
『安藝守清盛、兵庫頭頼政、いづれも達人でございまする』
と、お答へするを御階の下で聞いてゐた爲朝、覺えず聲を出して冷笑ひました。信西は其の方をキッと見て
『これは不敬なり、あれは誰であるぞ』
と問へば、爲義は恭しく
『あれは爲義が八男、冠者爲朝でございます、かかる席にまゐるべき者ではありませんけれども、御所には誰れにても參り仕ふるを御悦びの由に泄れ聞きましたれば、御ゆるしは得ませねど今日の講釋を外ながら、あれにも聞かせやうと思ひまして召し具して參りました』

と答へました。すると信西は聞きも終はらず座を起つて、御階の下に降りて來て
『玉座近きをも憚らずに、何事のあれば愚老を冷笑ひしぞ』
と、問ひ詰むれば、八郎は恐れず騷がず
『されば、世の人々が通憲入道は博士ではあるが、親疎によつて決斷に私ありと申しまするが、如何にも左樣でござる』
と答へました。けれども信西は益々清盛頼政が弓術に達する由を譽めたてましたから、八郎は又益々冷笑ひながら
『博士は文章の事には明るいでせうが、弓矢の事は知らるまい、誰れの彼れのと言ふのは無益、今の世に弓矢を取つては、この爲朝の右に出づるものあらふとは思ひませぬ』
と言つはなちましたから、信西入道は益憤怒の色を現はして

『さほどの大言をはく上は、いかほど矢繼早の矢なりとも即坐に取つて見られよ』
と威丈高になつて
『誰れでもよし、はやく弓矢を持つて參れ』
と、下知をすれば、式成、則員といふ二人が、急いで弓矢を持つてまゐりました。八郎は少しも屈する色なく
『さこそ御參なれ』
といふを、宇治左大臣藤原頼長は見兼ねて信西に向ひ
『十三の小冠者と物爭ひせらるるは、信西入道にも似合はしからんではござらんか』
と言ひ、又爲義に向ひ
『冠者を伴れてはやく立退かれよ』

と申されたから、爲義は
『されば、十三の小冠者では御座れど、この期に臨んで若し仕はたさずば、敵陣に臨んで後を見するも同前、源氏累代の武名を汚がしませう、何卒御免を蒙つて彼れがなすままに任かせ下され』
といへば、爲朝は
『式成、則員は無雙の弓取也、之れが矢面に立つは何より幸ひ』
と大手を擴げて立ちあがりさま信西に向ひ
『我れ若し矢を取り損ずれば、我が命はそれまでなり、されば若し矢を取り損なはずば何を給はるぞ』
といへば、信西は苦笑ひしながら
『御身が矢を取り損はずば、我がこの首なりと進せやう』
八郎は信西の言葉を耳にも入れず、はや庭の眞中に立ちました。皆

のものはこの有樣を見て、手に汗を握つて見てをりますと、二人のものは弓を滿月のやうに引き絞つて、ヒョーとはなす。八郎は長鳴りして飛び來る矢を物の見事に左右の手に受け取つて地上に擲げました。此度は二人矢先をそろへて一同に矢聲をかけ、八郎の胸を的にして切て放つを、八郎は一矢を片袖で縫ひ止め、一矢は鏃を口で嚙み碎きましたから、其の矢は折れて地に落ちました。八郎は御階の上に跳ねあがつて

『信西入道、いざその首を御渡しなされい』

とよびました。すると爲義は後から八郎の袖を引き止めて

『御前であるぞ、鄙陋の振舞するな、武士の身にて偶ま矢先を避けたればとて、珍らしきことにあらず、退き居れイ』

と御階の半ばから突き落し、手非道く八郎を打ち懲らしましたから

威勢の程を示さんとした信西入道、却つて面目を失ひました。

このことからして八郎は鎭西に下り、肥後の阿蘇三郎忠國の婿となり、十三歳の三月末より十五歳の十月までに、大事の戰をなすこと二十餘度、城を落すこと數十箇所、遂に九國を攻め落して筑前の大宰府を居城と定めましたから、九州の民八郎を尊んで鎭西八郎と申しました。

毛利元就幼時の大望

應仁の亂このかた、世の中は亂麻の如くに亂れに亂れて、英雄豪傑雲の如く起り、彼處に據り、此處に城き、たゞ自分の慾をみたすために戰爭し、血は河と流れ、死骸は積で山をなすをも、何とも思はぬ無道の世、暗黑の世に、毛利元就は士卒わづかに三百人に過ぎざ

る小勢よりもり立てゝ、遂に山陽山陰八國の主となり、しかも他の群雄に異なつて勤王の志あつく、或る時は貲を獻じて即位の式を助け、或る時は勅をうけて賊を討ずるなど、よく臣子の義をわきまへました。

さて元就の幼時はどうであつたかと申しますと、矢張子供の時分から世間のなみの子供とは違つて人に將たるの情があり、決斷力があり、又大きな考へをもつて居りました。

或る時御つきの者に抱かれて川を渡りましたところ、川底の石に躓いてもろともに溺れましたので、おつきの者は驚ろき恐れて、ひたすら其の罪をおわびしますと、元就は笑ひながら、

『何に、躓くのは世の中の常だ、決して心配することはない』

と、申しました。

七歳の時、白い雛を飼うて、大變それを愛してゐましたが、或る夜居なくなつて往く方がわからんやうになりました。そこで翌日諸々方々を探したところが、筑山の邊りにその雛の羽がちらばつてゐてそこに狐の穴がありましたから、

『雛をとつたのは此の狐にちがひない、燻べて殺せ』

と、其の用意をしてゐますと、お母さんはこれを聞きつけて大いに驚き、使者をやつてそれを止めさせやうとしましたが、元就は

『今もし家臣が喧嘩をして、一方が殺された場合に、殺したものを助けるいはれはない、雛も狐も自分のやしきにゐて見れば家臣も同様である、鶏を殺した狐を誅伐するのに、何の悪いことがあらうか』

と、いつてその使をかへしました。

十二歳の時、嚴島に參詣しましたが、歸つてから從者に向ひ
『お前達今日はどんなことを祈つたか』
とたづねますと、家臣共はみな〳〵元就の氣に入るやうに、それ〴〵思ひ〳〵に答へましたが、ある者が
『私は今日、我が君を中國の主にならして下さい』
と祈りましたといひますと、元就は
『中國とは愚な奴だ、なぜ天下を取るやうにとは祈らなかつたのだ』
と、申しますと、家臣は
『いや〳〵先づ中國を取つて、その後で天下はとられまするものを』
と、いふと元就は

『何に、棒ほど願うて針ほどかなふといふではないか、天下を取らうと思うて漸く中國ぐらゐは取られやう、初めから中國を取らうと思つてゐては、迚も中國も取られはしないぞ』
と申しましたから、家臣はその上何とも言ふことは出來ませんでした。
以上の話しだけでも、如何に元就が情ふかく、大將なる德をそなへてゐたか、決斷力があつて大事を決するに富んでゐたか、度量が大きくて天下を一呑にするやうな氣であつたことも知らるるではありませんか。

松平樂翁公幼時の自教鑑

松平樂翁公、その名は定信、子供の時の名は賢丸といひ、寶曆八年

十二月に生れました。初封が陸奥の白河の城主であつたので、又白河公ともいひます。公は子供の時分から大變身體は弱かつたけれども、才智は非常に人に秀てゐたのに、日夜學問や武藝を勉強しましたから、時の將軍家治も深く公を愛し、その身體の弱いのを心配して、どうか無事で生長してくれるやうにと祈つて居られました。

公は七歳の時から字を習ひ、又大塚といふ人に就て書物を讀み初めましたが、ある時孝經のはじめにある、夫孝徳之本也とあるのを讀んで、

『徳とは何の事であるぞ』

と聞かれたので、大塚は非常に驚いて、

『これは迚も尋常の兒童の心づくことではないのに、これに心づかるゝとは、まことに末恐ろしい若君である』

と申しましたが、はたして徳川三百年の間に、類まれなる立派な人物になりました。

十歳の時大塚に向つて、

『孝經に身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐとあるが、我が日本國をはじめ、唐土までも名を知られるやうにするには、矢張り身を立て、道を行ふにあらふと思ふが、さてどうすれば身を立て道を行ふことが出來るか』

とのおたづね、そこで大塚は、

『よい處に御心づきになりました、身を立て道を行ひますには、たゞ一心に學問を勉め勵まるゝより他に道はありません、けれども學問すれば兎角世間の事情に疎くなりやすいもので、殊に貴い人が學問しますれば、一層さうなりやすいもので御座いますから

かね〴〵世間の事情に通ずるやうに、御心がけなさるが何より肝要で御座います』

と申し上げました。これから公は役人どもの集つてをる部屋部屋に行つては、役人共が互に話しあつて居る種々の話を傍から聞いてゐて、若しわかり兼ねる事がある時には、細々と聞きただして、それをよく記憶してをられました。

十二歳の時に麻布の鳥居阪にゐた、戸川内膳といふ旗下の士の邸宅から出火して其邊の町家を多く燒き拂ひ、燒け死した人も亦澤山ありましたので、其の頃誰れが詠んだとも知れん歌に

この火事は人の命を鳥居阪
これより上の戸川(咎)は内(無イ)膳。

といふのがありました。人々は面白い事に思うて、上手に作つてゐ

るなどと話しあつてゐました。すると傍で聞いてゐた公は、

『身共がよめばさやうには詠まぬ』

といはれたので、人々は

『しからば何と御詠みなさいます』

と申すと、公は打ち笑ひながら

『いいまふぞ』

『どうぞ御聞かせ下さいますやう』

『いや〳〵いふまいぞ』

『さやう御隱しなさらずに、是非にどうぞ……』

『身共が詠めば四の句が違ふ』

『四の句が何と違ひまする』

『されば四の句を(怪我のことなら)と致すであらふ』

この火事は人の命を鳥居阪
　　怪我のことなら戸川内膳

全く歌の意味が違つて、間違ひの事ならば致し方はないといふことになつたので、人々は、流石に人の上に立つ度量が御有りなさるといつて、末頼母しく思ひました。

十三歳の時に、かね〴〵人の勤めねばならぬこと、又戒めねばならぬことを書き綴つて、自敎鑑と題せられました。それは左の通りであります。

自敎鑑

夫天地に陰陽あれば人に夫婦あり、ふうふあれば父子あり、父子あれば兄弟あり、兄弟あれば君臣あり、君臣あれば朋友あり、それ自然の道なり。

一、凡そ父母は慈と敎とを主とし、子は愛と敬とを主とす。

一、人の子たる者は能く父母に事ふるのみにあらず、又我身を愼みて父母の憂を遺す事なきを第一とす、古に曰く、父母はただその疾をうれふと、然れば別けて疾をつつしむべし。

一、父母ゐます時は遠遊せずといへり、是亦父母の憂をおそれてなり、況んや一朝の怒りに其身をわすれて、其親に及ぼす事やあるべき。

一、子をそだつる道は禮義正しく嚴かなるべし、かりそめにも愛に溺れてゆるがせにすべからず。

一、子を敎ふるには幼より善に導き、惡に馴れしむべからず、然らば友を擇ぶべし、水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友によるといふ事、格言なりと知るべし。

一、寵愛の子たりといへども、兄をさし置き弟に家を傳ふべからず是によりて國家を亂しし事こそ、其ためし歷然たれ。

一、人の臣たるものは、只その君有る事を知りて、身ある事を知らず、國ある事を知りて、家あることを知らず、臣たるの職此外あるべからず。

一、君の臣をつかふ事禮を以てすべし、君の一言によりて臣義をいたす事あり、又然らざる事有り、凡そ君德あれば、臣是に從ふ事草の風に靡くが如し。

一、人に君たるものは、先其德を明にして、民を治むべし、民を治むるは慈悲の心を第一とす。

一、君の心正しければ善人近づき、ただしからざれば佞人近づく、佞人ちかづけば君を迷はし邪路に導く、深くいましむべし。

一、凡臣を仕ふには其臣の安くして勞する事なからん事を欲すべし

一、夫は唱へ婦は從ふべし、これ陰陽の道なり、およそ妻をめとるは子孫のためなり、賢德を本とす、容色に迷ふ心あるべからずまた其人の分限によりて妻有らんに、是亦賢を擇ぶべし、容色を以て寵愛すべからず。

一、兄には恭敬をいたし、弟には慈愛を致すべし、共に父母の遺體なれば、相互に親みて疎にすべからず。

一、朋友は物をいひかはし事を頼みあふ者なれば、第一貞信にして相欺かざるを本意とす。

一、人は益友を近づけ損友を遠ざくべし、己に諂ふ人はわきて害ありと知るべし。

一、凡そ人に交はるには敬を主とす、たとへ酒宴をなし、歡を盡す

とも、禮容正しく敬の心を忘るべからず。

一、口舌は禍の門なり、口より出で我が身をうしなふ。

一、己が不機げんにまかせ、人を疎かにし、無禮なるべからず、また己に才ありとも、是を以て人にほこるべからず。

一、凡そ天下の人の中に貧賤なりとていやしむべからず、富貴も貧賤も皆天のなせるなり、死生命あり富貴天にあり、命なくば富貴もうけまじ。

一、不德にして富貴なれば驕を生ず、必ず其ふうきを保ちがたし。

一、凡そ人は慈悲心厚く人を憐むを第一とす、又つとめて眞實なるべし、內の誠なく外の飾を專にする者は、必ず久しからずして變ず、譬へば紅葉の華やかなるは、忽ちに色の變ずるがごとし。

一、人として萬事に思慮なきは惡るし、されど私意あるべからず、

みな學問によるべし。

右は自らいましめ、また己と同じき童蒙にも告げんとて、明和七のとし睦月の初、武城の側にしるしぬ。

三條實美公幼時の奇行

三條實美公は贈右大臣三條實萬公の子で、子供の時の名を福麻呂といひました、公の家は家祿四百六十九石ばかりで、生計が餘りよくありませんでしたから、公は二歲の時、加茂川の東新田村の農家楠六左衞門の家に預けられました。七歲の時自分の家に歸つて、それからは一心に書物を讀み、手習などを勵み、又武藝をも稽古されました、公は子供の時分から仲々怜悧でしたが、ある時澤山の子供達が寄り集つて戰ごつこをした時、他の子供達は皆德川家康だの、豐

臣秀吉だの、加藤清正だの、又は小西行長だのといふ、名高い人々の旗印をつくつて押し立てましたが、公はただ白い紙に日の丸を書いて、それを自分の旗印にせられたので、他の子供達は笑ひながら

『昔の大將達が戰をされたことは聞いたが、御日樣が戰をされたことはまだ聞かないから、何か他の旗印にしてはどうだ』

といふと、公は

『イヤ〳〵さういふものではない、是れは國の印だ、もし我が國と異國と戰をするときは、これでなくては駄目だ』

といつて、旗印をかへられませんでした。まだ其の時分は國旗といふものは、京都などでは知つた人も無かつたのに、公は早くから此の樣なことまで、氣をつけられたのは誠に感心です。

ある時のこと、戰ごつこもすみ、相撲取もあいたので、誰かが

『どうだ、此度は繪書をして遊ばうではないか』

といふと、皆は

『うんよからう』

といふので、硯を持つて來て墨をすつて、皆思ひ〳〵に自分の好きなものを書きました。龜の子を書くものもあれば鶴を書くものもあり、牛を書くものもあれば馬を書くものもあり、豚を書くものもあれば猫を書くものもあり、鮒を書くものもあれば金魚を書くものもあり、鷄を書くものもあれば雛を書くものもあり、山を書くもの、川を書くもの、又は人形を書くなど、それは〳〵賑やかなことでしたが、公は紙をつぎ合せて何んだか地圖のやうなものを、書いて居られたので、他の子供達はこれを見て、

『何んだ、面白くないものを書いて居るね』

『何んだい、畑を書いてゐるのか』
『畑ではない、將棊板だらふ』
『あんな大きな將棊板があるものか』
などと、いつて見てゐるのに、公はそんなことには少しも構はずに一生懸命に書いてをられたが、
『一體これは何を書いたのですか』
とたづねたものがあつたので、公は筆をとどめて、
『これは今の上樣の御住居なさる御所ぢや、太政官もあれば八省もある、御出居樣に聞いたのぢや』
と答へられると、
『今の御所はそんな大きなものではない、このやうな御所は何處にあるのか』

と、問ひかへした、すると公は筆をとつて書きはじめながら、
『おぬし達は知るまいが、わしが大きくなつたら、此のやうな御所をこしらへて、上樣に上るつもりぢや』
といはれたので、皆の子供達は聲をそろへて、
『それは何時の事だらふ、をかしいね』
と、ドット笑ひましたが、年を經て王政復古となり、太政官八省をおかるゝこととゝなりました。

ネルソン幼時の冒險

トラファルガルの海戰で、勝ち誇つたナポレオンの佛蘭西と西班牙との連合艦隊を悉く打ち破り、その身も敵彈にあたつて、見事名譽の戰死を遂げた英國の水師提督、ネルソンは、西暦千七百五十八年

九月二十九日、英國ノルフォーク州のバーンハム、ソープ村で生れました。ネルソンは性質弱い方でしたが、その頃英國に流行した瘧病のために、一層體を痛めました、けれども後世までも、かんばしい名を殘すほどの人ですから、その精神の快活なこと、氣だての立派なことは、子供の時分から他の子供とはちがつてゐました。

ある日、祖母さんのところから、牛飼の子供と一緒に、鳥の巣を捜しに出かけましたが、御食時になつても歸つて來ませんので、家の人々は心配して。若しや誘拐者に誘拐れはしないかと、人手を分けて所々捜しました、ところがネルソンはゐる小川の岸にゆつたりと坐つてちつとも、心配したやうな容子も見えませんでしたから、祖母さんは驚いて、

『お前はどうして今まで歸らなかつたの、飢じくはなかつたの、

そして恐ろしくもなかつたの』

と、たづねますと、ネルソンは不思議さうな顏をして

『祖母さん、恐ろしいつて何のことですか』

ときゝました。

或る年クリスマスの休で學校から家に歸りましたが、兄樣と一緒に學校の寄宿舍に歸らふとすると、大變雪が降り積つた上に、尚ほどん〳〵降りますので、兄弟は中途から家に引き還へしました。するとお父さんは二人を勵ますために

『若し雪が烈しくて、歩行くことが出來ねば仕方はないけれどもこれしきの雪にまけるとは意氣地が無いではないか』

といひました。然し雪は大變深く積もつてゐるし、又降りしきつてゐましたから、實際子供には馬に乘つて出かけるでも、中々容易な

ことではありませんでした、それで兄は進みかねて出かける容子はありませんでしたが、ネルソンは

『兄さん行きませう、學校に行きつくことの出來ると、出來ないとは自分等の名譽に係るではありませんか』

と、兄さんをせきたてゝ深く積つてゐる雪の中を、降りしきる雪を物ともせず、學校をさして急ぎました。

十二才の時、學校の休みで家に歸つてゐた時、ある新聞で叔父さんが六十四門の大砲を備へてゐる「レーゾネーブル」號の艦長になつたことを見ました。ネルソンは自分も海上の生活がして見たくてたまらず、遂に兄さんを賴んで此の事をお父さんに願ひました、お父さんはネルソンが體が弱いので、迚も烈しい海上の仕事には堪へられんだらうとは、思ひましたが、あれが一旦心を快めた上は、何と言つ

ても駄目だからといつて、その賴をいれ、自ら倫敦まで連れて行きそれから馬車に乘せて叔父さんのところへやりました。

ネルソンは叔父さんと面會して「レーゾネーブル」號に乘ることになりましたが、流石のネルソンも初めの程は、お父さんやお母さんや兄さんや、お朋友のことなどを考へて、何としても故鄕が慕はしくなつかしくて甲板の上を彼方此方と歩みつゝ、心淋しく日を暮らしました。それで大人になつてからも、その時の淋しかつたことを忘れずに、船に乘り込む少年があるたびごとに、何時も親切にしてやりました。

「レーゾネーブル」號はその後、間もなく其の職を解かれましたのでネルソンは叔父さんの周旋で、此の度は北極地方發見のために出帆せんとする船に乘り込み、海上で度々危險なことに出逢ひましたが

その度ごとに勇氣と決斷とを現はしました。ある時人知れず本船を下りて、諸々方々を歩き廻りました。ところが翌朝になつて大きな熊に出逢ひましたので、之れを射止めやうと鐵砲の臺を取りあげました、けれどもネルソンの命は危いこと風前の燈のやうです。此の時都合よく本船から、遙かにこの有樣を見て急に大砲を放ちましたから、熊はその音に驚いて逃げ去つたので、ネルソンは危い命を助かりました。あとで船長が

『お前はどうしてあんな危險なことをしたのか』

と、たづねますと、ネルソンは平氣なもので

『私はお父さんへの土産に、熊の皮を持つて歸らうと思つてゐましたに、取り逃がして殘念なことをしました』

と答へました。

松平信綱幼時の操守

松平信綱は子供のとき、後の三代將軍家光公のお側つきをしてゐました。ある時家光公が、軒端に雀の子を育てゝゐるのを見て、お側つきの者共に向ひ

『誰れかあの軒端の雀の子をとつてこい』

と、いひつけられましたが、雀が子を育てゝゐる所は、時の將軍秀忠公の御居間の上でありましたから、皆の者はそれを恐れてばかつて、誰れ一人進んで雀の子を取りに行かうといふものはありません。けれども家光公のいひつけであつてみれば、いやでございますとお斷りするわけにもゆかず、どうしたらよからうと相談してゐましたが、とう〳〵、信綱は年も若いし、體も輕いしするから、これは

一つ信綱をとりにやらうではないか、といふことに話しがきまりました。皆のものどもの恐れはばかるところ、信綱とても好きこのんで、雀の子をとりに行きたくはありませんが、皆の話しできまつてみれば、致し方はありませんから、

『それでは私が雀の子をとつてまゐります』

と、うけあひました。

うけあひましたけれども雀の子のをるところは、秀忠公の御居間のうへでありますから、迚も晝の中にとりにのぼるなどとは思ひもよらんことであります。そこで信綱は夜に入るのをまつて、靜かに屋根にのぼり、やつとのことで雀の子のをるところまでたどり、いまや雀の巣に手をいれんとする一刹那、足をすべらして高い軒端から、どつとばかり庭におつこつて仕舞ました。

この物音を聞きつけた秀忠公、この夜中にあやしの物音何んであらうと、自らは刀をとつて先きにたち、夫人に燭をもたせて庭先を御覽なさると、信綱がまだ起きあがりもせずに其處にゐましたので、不思議にお思ひながら信綱に向ひ

『信綱、其の方は何用あつて、夜中此處へまゐつた』

と、御聞きになりますと信綱は

『私しは晝の間、此の軒端に雀が子を育てゝをるのを見ましてはしくてたまらず、それで夜中それをとりにまゐりました』

と、申しあげますと

『なに、雀の子は其の方がほしいのではあるまい、必ずそれをいひつけたものがあらう』

と、繰り返しておたづねになりましたが、信綱は

『けつして左樣のことは御座いません、全く私がほしくて取りにまゐりました』

の一點張でおし通しましたから、秀忠公御立腹になつて、大きな嚢の中に信綱を入れ、其の口を結んで柱にかけ、

『其の方、眞直に白狀せなければ、此の嚢よりでること相ならんから、左樣心得よ、それともかくさず白狀致すか、どうだ〳〵』

と、責めつけられましたが、信綱は矢張初めのとほりお答へして、とう〳〵其の夜はそのまゝであけてしまひました。

秀忠公は、信綱を柱にかけたまゝ、役所においでになりましたから、夫人は信綱のけなげな志をあはれに思はれ、嚢を柱からとりおろして口をひらき、御飯をたべさせて、また元の通り柱にかけておかれました。

やがて秀忠公は役所からおかへりになつて、またも信綱をお責めになりました、信綱はどうしても初めの言葉をかへません、そこで夫人が中にはいつて、どうぞもうおゆるし下さいますやうに、と、執奏されましたので、信綱はやうやくゆるされることになりました。秀忠公は、かへつてゆく信綱の後姿を、御見送になつて、夫人に向ひ、

『他日我が子を補佐するものは、きつとあの子であらう』

と、仰せられましたが、はたして其の通りでありました。

フランクリン幼時の勉強

音に名高いベンヂヤミン、フランクリンは千七百七年、今から丁度二百年ばかりまへ、亞米利加合衆國はボストンといふところで生れました。お父さんはヂヨサヤスといつて、染物を仕事としてゐまし

た。この人はなか〳〵の子福長者で、男女とりませて十七人といふ大勢の子供がありました。フランクリンは其の十五番目の子供なんです。お父さんはフランクリンを行く末は耶蘇教の坊さんにしやうと思うてゐました。フランクリンは八歳の時から、學校にあがりましたが、元々家が貧乏だのに、十七人も子供があつてみれば、これを養ふさへ、なか〳〵なみ大抵なことではありません、それで學資を出してやることが出來ずに、とう〳〵退學さして或る速成學校に入れて、讀方、書方を習はせました。十歳の時、其の學校を卒業してからは、うちにゐて、一生懸命お父さんの仕事のお手傳をしてゐましたが、二年ばかりたつてから、一人の兄さんが船のりになりましたので、お父さんは『ベンまで船乘になつてしまつては大變だ』と心配して、それから鍛冶の稽古をさせましたが、どうも思ふやう

にいきません、ところへヂエームスといふ兄さんが、英國から歸つて來て、ボストンで活版屋をはじめましたから、フランクリンはそのお手傳をすることになりました。

ところでフランクリンはなか〳〵の學問好きで、暇さへあれば書店へ行つて書物を買つて來て、それを讀んでは夜のあけるのも知らん位でした。けれども貧乏ものゝ悲しさ、買ひたい本はいくらもあつても、さう〳〵お金がありませんから、あゝ殘念なことだ、お金があればあの書物も買ひたい、あの本も讀みたいと思ふてをりました。するとその近所にゐた一人の金持がフランクリンが、仕事にも精をだし、學問にもなか〳〵熱心なのを見て大いに感心して、ある日フランクリンをよんで

『お前はなか〳〵感心なものだ、仕事にも骨を折るが、暇さへあ

れば勉強もする、私はお前の心掛に感心したから、その褒賞として、これから私のもつて居る本を、何んでもお前の心まかせにかしてあげるから、一つウンと勉強するがいゝ』

とのことでありましたので、フランクリンの喜びは、例ふるに物もなく、それから書を買ふお金に心配することもなく、暇さへあれば勉強し、夜もおそくまでつとめましたので、學問は日にまし上達して、詩もつくれば文章も上手になりました。

この頃フランクリンの仲よい友達に、コルリンといふものがありましたが、またなか〳〵の學問好きで、これも詩もつくれば文章も上手でありました。ある時ふとしたことから學問上の議論をはじめましたが、二人とも負けず劣らずの學問好きのことですから、なかなか勝負がつきません、そこで

『どうだ君、口でいくら議論してもつまらんから、これから筆の上で議論を戰はさうではないか』

と、いふことになり、それから手紙の上で縱橫無盡に辯難攻擊しましたが、フランクリンは、どうしても自分の文章がコルリンほど上手ではないといふことを悟り、それからは專ら力をこめて作文を稽古しました。

ある時、肉食は菜食よりもきゝめが薄い、といふことを書いてある書物を讀んで、成る程と思ひ、それからは肉食をやめて野菜ものをたべることにしました。友達などが、をかしなまねをするものだ、と笑つても平氣なものです。それで今までとするとお金がかゝらず、あまつたお金で好きな書物を買ふことが出來たり、何に彼につけて好都合でしたから、

『兄さんや他の職工達は、皆うちにいつて御飯をたべるのに自分一人は工場にゐて、麵麭と菓物と一杯の水とあれば、食事はそれで十分だ、おまけに皆が往き來につぶす時間で、好きな勉强も出來る、自分が察しのいゝのも、物の道理の早わかりするのも、皆菜食して食物を節制するからのことである』

と、いつて自ら其の身を修めるために、十二則をつくつた時に、食物の節制といふことを、第一番におきました。

十二則

この十二則は、フランクリンが少年の時、其の身を修めるためにつくつたものです。

一、節制。氣の重くなるまで物を食はず、極度まで酒を飲まず。

二、寡默。自他を益するにあらずんば言はず、瑣末の談話をなさず。

三、秩序。物其ところを守らしめ、業其時を守らしむ。

四、決斷。爲すべき事をなさんと決斷し、決斷したる事は必ず行ふ。

五、儉素。自他を益することのほか、浪に費さず。

六、勉强。光陰を失はず、常に有用の業に從事して、無用の行ひを捨つ。

七、眞實。欺罔を行はず、思ふ事は必ず直、言ふ事は必ず實。

八、公正。不義の行ひをなし、或は己れの要務を缺で人を害せず、

九、中和。偏僻を遠ざけ怨みを忍ぶ。

十、清潔。身體衣服、住居に不潔を留めず。

十一、平穩。瑣末の事、或は尋常一般の事故のために動されず。

十二、寛仁。己の安和を妨げず、人の名譽を害せず。

森蘭丸幼時の心がけ

（一）

森蘭丸は性質怜悧で、物事に心がけがよく、正直でおまけに膽玉が大きくわりましたので、主人、織田信長から、大層かあいがられました。

或る日蘭丸は信長の刀を持つて、お側につかへてゐましたが、あまりの退窟さに、刀の鞘についてゐる紋をかぞへてゐました。信長はそれを知つてゐましたが、其の時は何んともいはず、四五日たつてからお側つき臣どもをめしよせて、

『もしお前達の中に、この刀の鞘についてゐる紋の數を、いひあ

てたものがあつたら、褒賞に此の刀をつかはすから、あてゝ見よ』

と、いひましたから、皆の者はよろこんで、自分こそは紋の數をいひあてゝ、褒賞の刀を貰ふと、めい〳〵先を爭うて其の數をいひましたが、たゞ一人蘭丸は、口をつぐんで一語もいひませんので、信長は

『どうだ蘭丸、ほかのものは皆紋の數をいふのに、お前一人は、どうしてだまつてゐるのか』

と、きゝましたから、蘭丸は

『さやうで御座ます、私は先日お側につかへました時、その紋の數をかぞへて、今もよくそれをおぼえてをりまする、それに今知らないまねをして、それをいひあてましては、御褒賞を貰ひたいために、君樣を欺き又自分の心をだますもので御座まして、まこ

とに男子たるものゝ、恥づべきことで御座ますから、私はだまつて申しあげずにをる次第で御座います』

と、答へましたから信長は大變その正直なのをおほめになつて、その刀を褒賞として蘭丸に下さいました。

（二）

ある時信長は、どれ位蘭丸は氣がきいてゐるか、一つためして見やうと思つて、前持つて座敷の障子を、ちやんと閉めておいて蘭丸をよび

『お前は御座敷の障子を閉めて御出なさい』

と、いひつけましたから、蘭丸は早速起ちあがつて、御座敷にいつてみますと、障子はちやんと閉まつてゐます、そこで蘭丸は、このまゝかへつてしまつては、主君の命令に反くことになる、それでは

まことに不都合であると思ひまして、靜かに音のせんやうに、障子をあけて、わざとゴツンと音をさせて、それをしめて、座敷にかへり、

『たゞいま障子を閉めてまゐりました』

と、申しあげましたから信長は

『どうだ蘭丸、障子はあかつてゐたか、それともしまつてゐたか、たゞいまゴツンと音のしたのは、あれは何んの音であつたか』

と、御たづねになりましたから、蘭丸は、

『たゞいま御座敷の障子をしめるやうにとの、御命令で御座いましたから、行つてみますと、障子はちやんとしまつてゐましたがたゞそれをみたばかりでたちかへりましては、君樣の御命令にそむくことになると思ひまして、わざと靜かにあけまして、強くし

めてまゐりましたので御座います』

と、答へました。なんと氣のきいたものではありませんか。

(三)

ある日信長は、自分の爪を剪つて、それを座敷にちらし、お側づきの童子をよんで、それを拾はせては元のとほりちらし、ちらさしては拾はせ、拾はせてはちらさしてゐましたが、そのうちに蘭丸の番になつて來ましたから、蘭丸は一つ二つ三つとかぞへながら九つまで拾ひましたが、十目の爪をみつかりませんでしたから顔をあげて信長に向ひ

『今一つの爪はどこに御座いますか』

と、たづねましたから、信長は笑ひながら

『何事にもそのとほり氣をつけなければならぬ』

と、いひ〳〵掌を開きましたところが、はたして一つの爪がおちました。ほかのお側つきの童子たちは、誰れも人の指は十本あるから爪も十なければならぬといふことに氣がつかないのに、蘭丸一人一つの爪がたらんといふことに氣がつくとは、よく〳〵こまかいことまで氣がついたものではありませんか。

(四)

其のゝち蘭丸は、明智光秀が信長に對して、反旗をあげやうとする心があることを知り、ある日、信長にむかつて

『私が光秀の食事するのを見てゐましたに、箸を落しました、これはその志ざし決してちいさきものではありません、必ず君樣に對して反旗をあげやうとしてをるものでありますから、今のうちにこれを除きませんでは、あとでとりかへしのつかんことになり

ませう』

と、申しあげましたが、信長はたゞ蘭丸が光秀のことを讒言するのだらうとばかり思うて、きゝ入れませんでした、然るに蘭丸の察した通り、其の後光秀は反旗をおこして信長を本能寺にせめて之を殺しましたが、其の時蘭丸も百餘人の味方と共に、力のかぎり奮戰して、恨みはふかき本能寺の、葉末の露ときえてしまひました。

福島正則幼時の剛腹

賤ヶ嶽七本鎗の一人として、其の名名高き福島正則は、もと三河の郷士であつたが、其の後家道零落して民間にをり、ながく尾張の中村に住んでゐた、福島新右衛門の子で、子供の時の名は市松といひました。

ちいさい時から顔容からして他の子供とかはり、力が強くて氣が荒く、やうやつと動ける頃から、茶碗皿をはじめ色々の道具を、手あたり次第にたゝきこわしますので、お母さんはそれを心配して、何時も仕事をする時には、市松の腰に繩をつけて、それを石臼に縛りつけておくことにしてゐましたが、市松は動ともすればその石臼をずる／＼と引きずりながらあばれまはるのでありました。

市松の家はあまり暮らしがよくありませんでしたから、僅か七才の時、ある桶屋に奉公しました。ある日のこと主人のいひつけで用たしに出かけますと、其のころ惡少年といはれてをる一人の少年、年は十六で丈は高く、おまけに力の強いのを自慢して、年下の者をとらへては自分の召し使のやうにしてをる厄介者に出つくわしました

すると惡少年は市松をとらへて

『オイ君、一寸僕の使にいつてくれまいか』

といひました。他の子供たちならば、ハイ〳〵といつて、いはるゝ通りに使するのですが、市松はなか〳〵そんな氣の弱い子供ではありませんから、

『なんだ、僕は君の召し使ではないから、君の使なんか眞平御免だ』

といひました。惡少年は市松が年も少く體もちいさいくせに、いひつけをきゝませんから、むつくり怒つて市松をなぐりつけました。いひつけさへもきゝいれん市松が、ぶたれてなんでそのまゝ默つてゐませう、いきなり刀を引き拔いて惡少年の肩先に切りつけましたから、血はだら〳〵と流れて惡少年の着物はみるまに眞赤になりました。そこで惡少年は泣きながら

『僕がわるかつたから、勘辨してくれ………』

と、いひましたが、市松はそれを耳にも入れず、こぶしをかためて惡少年の泣き顔をポカリ〳〵となぐりつけました。ところへ主家のものが走つて來て、市松をつれて家にかへり、

『お前はあの子供に傷をおはしたから、それでいゝではないか、それに泣いてゐる奴の顔をなぐるなんてあまり非道ではないか』

と、いましめますと、市松は平氣なもので、

『なんだあの意氣地なしめ、年は多く丈は高く、大きな體をしてゐて、少しばかりの傷に泣きさけんで、たすけてくれもないもんだ、だから後日のこらしめのためになぐつてやつたんだ』

と、いひましたから、主家のものどもは皆其の剛腹に呆れかへつてしまひました。それは市松が僅か八才の時のことでありました。

豐臣秀吉の幼時

豐臣秀吉は天文五年の正月の元旦、尾張國愛知郡中村で生れました顔つきが如何にも猿ににてゐるところから、人は皆な秀吉のことを「猿」「猿」といひました。日吉丸はその幼名です。うちが貧乏であつたのに、八才の時お父さまが死んでしまひましたので、うちは一層貧乏になつて、着る衣服もなければ、食ふ食物もないといふ、あはれはかない有樣になりました、そこで坊主にしやうと思うて、光明寺にたのみました。日吉は御經のことなどには頓着ないが、戰話を聞くのが何よりの樂みでした。ある時歎息していふには

『坊主などは乞食とおなじことだ、折角男と生れ、幸ひに此の亂世に遭遇した以上は、顔を厚くして乞食を學んでなるものか、これからは思ふ存分あばれまはり、近所の子供等を集めては山にのぼり、野をかけまはり、喧嘩をしたらなぐり飛ばし、坊主どもが自分を蛇やまむしのやうにきらふやうにしてやらう』

と、それからはといふものは少も命令をきかず、子供を集めてはわめく、さわぐ、いくさごつこをやる、喧嘩をする、なぐるなかせるといふ有樣に、坊樣たちは呆れかへつて、とう〳〵寺から追ひだしました。日吉はうまく計略があつたのを心の中にはよろこんだものの、また繼父の怒をおそれて

『坊主目等が我れを追ひだしたから、我れは寺に火をかけて、皆の坊主どもを燒き殺して、この恨をはらしてやる』

と、いひちらしました。すると日吉の亂暴なことを知りぬいてゐる坊主共は、これを聞いて吃驚し、寺に火でもつけられてはそれこそ

一大事、日吉の機嫌をとるが上策と、衣服を與へて家にかへしました。

日吉はうちにかへて、かはい弟や妹と一緒にをることが出來るやうになりましたけれども、うちはいよ〳〵貧乏になつて、お腹はすいても食ふ物はなく、寒いからとて着る衣服もないので、日吉は大奮發して、親兄弟を養ふのは此の時にありと思うて、或る時は籠を脊負て草刈に行き、或る時は牧童の群に入つて牛の尻をたゝき、羊を追ひまはし、或る時は河に魚とりに行つたり、また或る時は山に薪とりにいつたりして、一二年の間一生懸命に働きましたが、少年の腕では迚も親兄弟を養ふことは六ケ敷のでお母さんは日吉をさとして人のうちに奉公させることにしました。けれども我がまゝの強い日吉のことですから、向ふからやめさせられねば、自分から飛び出して、三ケ年の間に三十八度も主人どりをしました。

天文十二年、十六才の時、決然志をたてゝ鄕關をいで、東をさして清洲にゆき、そこで針を買ひ入れて道々それを賣り、夜岡崎について宿をもとめましたが、皆ことはられましたので、道をかへて矢矧にいで、橋の眞中に露宿しました、月はくまなくてらし、水煙はうすくこめて、丁度秋のやうな風情、何んとも旅人等の思ふ事多き晩でありました。それでも道のつかれにいつしかぐつすりねこんで、目をさましたは早や夜の明けがた、露はしつとりと袖をぬらし、明方の氣は身にしみて、ねむらふとしてもねむられず、夢うつゝの境に迷うてゐる時、たちまち足音がして日吉をふみました。日吉はイキなり飛び起きて、眼をこすり〳〵これを仰げば二三十人ばかりの荒武者、鐵砲をかついでをるものもあれば、刀を持つて居るものも

あるから、

『何んだこの奴等め、人の頭を蹴るとは何事ぞ、我れは年は若くとも、汝等如きに頭をけられて、だまつて引きさがつてをるやうな腰拔ではない、すみやかに謝罪いたせ』

と、大音あげてよばはりましたその眼の光り雷のやうです。荒武者どもゝ、その權幕におどろ恐れて、遂に腰をかゞめて禮をのべました。

日吉はそれから東の方、遠江の國に入り、今川家の家臣の松下之綱といふものに途中であひました。之綱は其の顏付といひ、骨ぐみといひ、自ら他の少年と異つたところがあるので、

『オイお前は何處から來たのか』

とたづねますと

『尾張から來たのだ』

『何にしに來たのだ』

ときくと

『仕事を見つけに來たのだ』

と答へましたから、之綱は

『それでは、ともかくもつれていつて見よう』

といつて、お邸へ歸り、すぐに衣服をかへさせました。

日吉は之綱のおそばにゐて、夜晝なしに雜多のことをしましたが、何をしても手早く、器用で、迚も他の少年らの遠く及ぶ處ではありませんので、之綱は大層日吉をかはいがつて、やがては望みどほり立派な武士にとりたてゝやらうと思つてゐましたが、主人にかはいがられる者は、朋輩にねたまれるのは昔も今も同じ事で、お邸で何

か紛失物でもあると

『それはあの猿めが盗んだのだ』

『ウン猿に違ない』

『猿だ猿だ』

といひはやしますので、日吉もつらく思ひましたが、之綱も氣の毒に思ひまして、旅費をくれて尾張へかへしました。それは日吉が十八才の時であります。

その後日吉は信長に仕へました、するとある日のこと、日吉が信長のゐるすぐ下を通りましたら、信長は手を伸して日吉の頭をくるりとまはしました。こんなことはよく子供同志でたはむれにするものですから、信長は何心なくやつたのです。すると日吉はあふむいて

『今おれの頭に手をつけたのは誰だ』

と、いひながら、つか〳〵と樓上へやつて來て、

『さあ、今のは誰れだ名を名のれ、失禮千萬な奴である、男なら男らしくおれと勝負をせよ』

と大聲で呼はりましたから、はじめの中はだまつてゐた信長も、日吉の容子がほんとに怒つたらしいので

『今のはおれだ、そちの膽玉をためさうと思うてやつたのだからゆるしてくれよ』

とあやまりましたから、日吉も笑つてしまひましたが、信長が日吉を重く用ひたといふのは、これからださうです。

日吉が信長に重く用ひられてからの事、ある年の正月、信長の家臣がみな登城しました時、信長は突然に

『槍は長いのがいゝか、短かいのがいゝか、皆々どうだ』

と、たづねましたから、槍術の師範役で、上島主水といふのは進みいでゝ

『槍は短い方がよろしうござりまする』

と申しあげました。すると居ならぶ面々、誰れ一人としてこの師範に反對するものはありませんでしたが、日吉は

『いや、某におきましては、槍は長い方が利益だらうと存じまする』

と申しあげました。

信長はたゞ「フーン」といつてゐたばかりでしたが、主水は居直つて日吉の方にふりむき

『槍のことなどは、貴殿の知つたことではござらぬ、默つてお出なされよ』

と、言葉あら〳〵しく罵しりましたので、日吉も

『議論は無益と存じますれば、それよりも實地に試みるが何よりで御座る』

と、いひますと、主水も

『それはもとより某が願ふ所』

といひましたゆゑ、それではといふので、信長が日を定めて、槍の試合をさせることになりました。

主水は、この座を退きさますると、すぐに門人どもに事の一伍一什を話しまして、その日からよるひるかけて稽古をはげました、しかるに一方日吉の方では、平氣の平左衞門で、家臣どもを集めては、毎日のやうに御馳走をして、折角とからだを養はせました。

さていよ〳〵試合の當日となつて、兩方から同じ位の人を出して試

合をさせましたが、どうも主水の門人は負けるばかりであるので、主水はやつきとなつて

『それでは日吉殿と試合いたすでござらう』

といひだしましたので、日吉は

『それこそ好敵手』

と、主水は短い槍をとり、日吉は長い槍をもつて、しばらく試合ましたが。槍師範の主水も、みごとに負けとなりまして、信長はじめなみゐる面々、口を揃へて日吉の妙技をほめました。これはやゝ年とつてからのことでありあります。

桐野利秋の幼時

桐野利秋は天保九年の年のくれ、鹿兒島市の北方一里ばかり、市と

吉野村との中間にあたる、實方といふところで生れました。子供の時から體が丈夫で、病氣にかゝつたことはありませんでしたが、惡戯が大好きで、よく近所の子供といさかひもしましたが、たゞの一度も泣かせられて歸つたことはなく。また何事につけても、おそろしいといふことを知らんやうな容子でありました。

十歳ばかりの時から、火藥を持つて遊ぶことを知つて、うちにしまつてある火藥を持ちだしては、ポスリ〳〵やらかすのが、如何にもあぶないので、兄さんは鎧櫃の中に火藥をしまつて、利秋がとりだすことの出來ないやうに、しつかりと錠をおろして、これなら大丈夫、いかな亂暴者の利秋でも、もうとりだすことは出來まいと、安心してをりましたが、それから二三日たつてから、利秋が眉毛はのこらずなくなし、髮も大部焦げて、おまけにあすこゝ火傷をして

歸つて來ましたから、兄さんは、若しやと思つて、鎧櫃のところへいつてみますと、こは如何に、錠はさん〴〵に打ちくだかれて、火藥はもういくらも殘つてはゐませんでした。兄さんはこれをみて、今更ながら利秋の亂暴なのに驚きましたが、利秋は火傷をしながら痛いともいはず、痛いやうな顏つきもしませんので、かへつて其の剛情なのにあきれてしまつて、別に小言もいひませんでした。

利秋は初め兄樣から句讀を習ひましたが、のちには四郎兵衞といふおぢいさんについて習ひました。この四郎兵衞といふ人は、ある時市中で天狗を呼び集めたとかいふことで、藩廳のとがめをうけ、德之島といふ離れ島に、十餘年も島流しにされたほどの一奇人でありますが、大層利秋をかはいがつて、丁寧に敎へましたが、しかしまたなか〳〵嚴格で、少しも大目にするやうなことはなく、もし利秋

が復習をなまけたり、前へのところをわすれるやうなことがあればひどくしかりつけて、その日は澤山の課業を命じて、なか〳〵歸してくれませんので、利秋はいやで〳〵たまりませんが、どうすることもできません。それでやうやくゆるされて門をでると、さつそく

『馬鹿オンヂョ、馬鹿〳〵、馬鹿オンヂョ』

と、おぢいさんの惡口いふのが常でした。オンヂョといふのは鹿兒島の方言で、おぢいさんといふことであります。

それで利秋はおぢいさんのところへ、書物を習ひに行くのが大嫌ひで、馬鹿〳〵、と惡口してかへつて來た翌日は、おぢいさんのところへ行く氣色もないのを、おかあさんと兄さんとは、叱つてみたり、さとしてみたりして、書物習ひにやるのでした。おぢいさんはまた、馬鹿オンヂョ〳〵馬鹿〳〵といはれても、利秋が